

放送大学長崎学習センター 開設30周年記念誌



目 次

放送大学長崎学習センターの沿革	1
所長挨拶	2
放送大学長崎学習センター開設 30 周年記念式典ごあいさつ 長崎学習センター所長 山下 敬彦	
来賓祝辞	4
放送大学長崎学習センター開設 30 周年記念式典 (祝辞) 放送大学長 岩 永 雅 也 長崎大学長 河 野 茂 長崎県教育委員会教育長 中 崎 謙 司 NHK 長崎放送局長 山 本 真 人	
歴代所長・客員教員・事務(室)長からの寄稿	9
第五代所長 崎 山 毅	
第六代所長 東 條 正	
第七代所長 伊 東 昌 子	
元長崎学習センター客員教授 杉 山 博 昭 (ノートルダム清心女子大学教授)	
元長崎学習センター客員教授 杉 原 敏 夫 (長崎大学名誉教授)	
元長崎学習センター客員教授 浦 田 秀 子 (長崎大学名誉教授)	
元長崎学習センター客員教授 稲 田 俊 明 (九州大学名誉教授)	
元長崎学習センター客員教授 片 峰 茂 (地方独立行政法人長崎市立病院機構理事長)	
元長崎学習センター客員教授 永 田 康 浩 (長崎大学教授)	
長崎学習センター客員教授 西 田 孝 洋 (長崎大学教授)	
長崎学習センター客員教授 堀 内 伊 吹 (長崎大学教授)	
長崎学習センター客員教授 加 來 秀 俊 (長崎大学准教授)	
長崎学習センター客員教授 丹 羽 量 久 (長崎大学教授)	
長崎学習センター客員教授 宮 原 春 美 (長崎大学名誉教授)	
長崎学習センター客員教授 山 下 樹三裕 (長崎大学名誉教授)	
元長崎学習センター事務室長 鳴 海 幸 雄	
元長崎学習センター事務長 佐 藤 三 郎	
元長崎学習センター事務長 宮 原 俊 夫	
元長崎学習センター事務長 山 崎 雅 彦	

卒業生・在学生からの寄稿	28
放送大学名誉学生	満岡 剛太郎
放送大学名誉学生	白仁田 聖紀
放送大学長崎同窓会会長	高潮 昇
放送大学長崎同窓会	峰 昭子
学友会会長	田畑 良高
俳句クラブ代表	橋 勇
旅行研究会代表	溝口 健治
パソコンサークル代表	香月 やゑ子
元学生	武田 秀雄

写真で見る長崎学習センター	38
長崎学習センター開設30周年記念事業	
卒業証書・学位記授与式／入学者の集い（新入生オリエンテーション）	
面接授業	
客員教員によるゼミ	
公開講座・講演会	
広報関係（出張オープンキャンパス）	
学生研修旅行	
その他の行事	
サークル活動	

資料一覧	44
1 入学者数の推移	
2 在学生数の推移	
3 卒業生・修了生数	
4 面接授業	
5 公開講座（公開講演会）	
6 学生研修旅行	
7 施設概要	
8 歴任教職員スタッフ	

編集後記

放送大学長崎学習センターの沿革

- 平成 4 年 4 月 1 日 初代センター長に高橋 清氏が就任
職員数 5 人（センター長 1、事務室長 1、事務職員 3）
- 4 月 10 日 長崎ビデオ学習センター開設準備室を多良見町町民センター内に設置
- 5 月 27 日 「放送大学長崎ビデオ学習センター」看板除幕式
- 9 月 18 日 長崎ビデオ学習センター開所式
- 9 月 26 日 第 1 回「入学者の集い」
- 10 月 1 日 選科履修生・科目履修生受け入れ開始 入学者 391 名
職員 7 名（2 名増員、事務職員 1、パート 1）
- 11 月 22 日 平成 4 年度第 2 学期から学生研修旅行実施
- 平成 5 年 11 月 24 日 長崎ビデオ学習センター入居のテーエスデー株式会社が倒産
- 平成 6 年 6 月 24 日 「長崎ビデオ学習センター」を「長崎地域学習センター」に改組
- 10 月 1 日 職員 8 名（事務職員 1 名増員）
平成 6 年度第 2 学期から面接授業実施（集中型）
- 平成 9 年 4 月 1 日 第 2 代センター長に佐伯重幸氏が就任
- 平成 10 年 4 月 9 日 「長崎地域学習センター」を「長崎学習センター」に名称変更
- 10 月 1 日 全科履修生受け入れ開始
- 平成 12 年 9 月 1 日 客員教員・6 名体制になる
- 平成 13 年 4 月 1 日 第 3 代所長に鹿川修一氏が就任
- 平成 14 年 4 月 1 日 修士全科生、修士科目生受け入れ開始
- 平成 16 年 4 月 1 日 長崎大学内（長崎市文教町）に移転
第 4 代所長に浦 晟氏が就任
職員 9 名（パート 1 名増員）
- 6 月 24 日 長崎学習センター移転披露記念式典を挙げる
- 平成 17 年 4 月 1 日 修士選科生受け入れ開始
- 平成 18 年 8 月 放送大学・長崎大学との合築棟建築着工
- 平成 19 年 4 月 新校舎落成
- 5 月 30 日 合築披露式典を挙げる
- 平成 20 年 4 月 1 日 第 5 代所長に崎山毅氏が就任
- 平成 22 年 10 月 10 日 長崎学習センター第 1 回文化祭「近代日本の夜明けは長崎から」を開催
- 平成 23 年 4 月 1 日 職員 8 名（パート 1 名減員）
- 11 月 18 日 放送大学長崎学習センター開設 20 周年記念講演会・記念式典挙げる
- 平成 25 年 4 月 1 日 第 6 代所長に東條正氏が就任
- 平成 28 年 10 月 9 日 長崎学習センター第 2 回文化祭「近代日本の夜明けは長崎から Part II」を開催
- 平成 31 年 4 月 1 日 第 7 代所長に伊東昌子氏が就任
- 令和 3 年 9 月 1 日 第 8 代所長に山下敬彦氏が就任
- 令和 4 年 5 月 18 日 長崎学習センター開設 30 周年記念式典・記念講演会挙げる
- 6 月 1 日 職員 7 名（1 名減員）
- 10 月 30 日 長崎学習センター第 3 回文化祭「長崎学習センター開設 30 周年を迎えて」を開催

放送大学長崎学習センター開設 30 周年記念式典ごあいさつ

長崎学習センター所長 山下 敬彦

放送大学長崎学習センターが 30 周年を迎えることができたのは、放送大学本部のご指導・ご鞭撻、歴代の長崎学習センターの所長をはじめとした教職員の努力、ならびに関係の皆様方のご協力の賜物であり、関係各位に厚く御礼申し上げます。また、本日は 30 周年の慶びをご来場の皆様とともに分かち合いたいと思います。

さて、放送大学長崎学習センターは、1992 年 4 月に長崎ビデオ学習センターとして多良見町（現 諫早市）でスタートし、同年 10 月から選科履修・科目履修生の受け入れを開始しました。その後、放送授業の全国 CS 放送開始に伴って、1998 年 4 月に長崎学習センターに改組され、同年 10 月から全科履修生の受け入れを開始しました。2004 年 4 月には長崎大学文教キャンパス内の借用施設に移転し、2007 年 5 月に新設された長崎大学附属図書館との合築棟の 3・4 階部分の固有施設へ入居し、現在に至っています。



長崎学習センターは、3・4 階部分全フロア 1,093㎡を占有し、講義室 2 室、実習室、視聴学習・図書室、多目的室、学生相談・保健室、リフレッシュルーム、教材準備室、客員教員室等の施設を備えています。どの部屋も使用目的に応じた設備が整備され、学生相互の交流も円滑に図れるよう、環境が整えられています。火曜日から日曜日までの週 6 日間開所しており、面接授業や放送授業科目の視聴学習、単位認定試験などが行われています。また、長崎大学正門の近くには路面電車の電停やバス停があり、長崎学習センターは長崎大学正門から徒歩 2 分の場所にあります。

このように、交通の利便も良く、素晴らしい環境の長崎学習センターには、現在 10 代から 90 代までの広い年齢層の学生が約 750 名在学しており、公務員や看護師の方の割合が全国平均より高くなっています。個人的な職業・人生キャリア形成はもちろん企業等における職員研修、公務員や看護師の方々の職業能力向上や資格取得等の職業キャリア形成のための自己啓発学習に有効に活用されています。

ところで、20 周年記念行事が開催された 2011 年は東日本大震災が発生した年です。ちなみに、設立時の 1992 年はユーゴ連邦崩壊、サラエボ中心部で内戦が激化した年です。前年の 1991 年には湾岸戦争が勃発し、ソビエト連邦が消滅しました。10 周年の 2002 年にはイラク情勢をめぐって緊張が高まり、翌年には米英によるイラク攻撃が行われました。前年の 2001 年はアメリカ合衆国で同時多発テロが起きた年です。また、翌年の 2003 年には中国で SARS が大流行しました。

今回の 30 周年は、新型コロナウイルス感染症とロシアによるウクライナ侵攻の 2 つの大きな事件と重複しています。どちらも我々の生活様式を変えてしまうような大きな出来事であり、我々を不安の中に陥れていることに変わりはありません。一方で、これらの出来事は我々に教訓を与えてくれていると見ることもできます。

新型コロナウイルス感染症は我々に「正しく恐れる」ことが重要であることを教えてくれました。正しく恐れるとは、正確な知識に基づき正しく判断して行動するということです。正確な知識と正しい判断力は、いわゆる学習を通して得ることができます。すなわち、未知の事象に対応するために、我々は日々学習しなければならないということです。このような学習を支えるのが放送大学であると思っています。

一方で、ウクライナの問題は我々に「偏った見方の恐ろしさ」を教えてくれているような気がします。偏った見方と強大な力が合わされると、21 世紀でも戦争が勃発することもあり得ることが分かりました。如何に複眼的な見方が重要かを改めて思い知らされました。複眼的な見方は、幅広く正しい知識の獲得によって身

につくものです。すなわち、偏らない普遍的な学習が必要です。放送大学はそのような普遍的な教養教育を提供しています。

このように、放送大学の役割はますます重要なものになっています。長崎学習センターは多様な学習者の知的欲求に応えるべく、授業内容の充実、サービスの向上に努力してまいります。つきましては、関係の皆様方のご指導、ご鞭撻をお願いして私の挨拶とさせていただきます。



放送大学長崎学習センター開設 30 周年記念式典（祝辞）

放送大学長 岩永 雅也

放送大学長の岩永でございます。本日は長崎学習センター開設 30 周年ということで大変おめでたいこの場にお招きいただきましてありがとうございます。一言ご挨拶をさせていただきます。

私は放送大学に長く勤めております。おそらく放送大学の専任教員の中で一番長い部類だと思います。子どもの頃に私は東京の葛飾区というところに住んでいたのですが、そこで潮干狩りをするというところからここだろうというのが、遠浅の広大な海、幕張でした。

そこで、アサリやハマグリを掘っていたその真上で仕事をするようになるのは、もちろんその当時思ってもみませんでした。今から 40 年くらい前にその幕張の土地が埋め立てられ、広大な平地が出現しました。そのすぐ後、周囲には何も無いところに放送大学の本部棟がポツンと建てられました。私が関西の方の大学から転勤するというので初めて放送大学本部に来たのは、まさにその直後のことでした。

それから、さきほどの山下所長の話の中にありましたが、30 年以上の月日の間に様々なことがありました。特に、もうお忘れになっている方も多いと思いますが、当時の放送大学は南関東だけで教育活動をしておりました。南関東といいますが東京、千葉、埼玉、神奈川、群馬の一部、そのくらいにしか電波が届いておらず、正規の学習センターの数も 6 カ所と、今と比較すると非常に限定的な、そういう状況でした。

しかし、国の予算、国の税金が多く投入されている大学でしたから、それはおかしいだろう、いくら何でも南関東だけそういう恩恵があるのはおかしいだろうということで、全国化は至上命令だったのですけれども、やはりいつか全国展開というわけにはいきませんでした。それでも、1990 年代に入りましてから、この県にも、ここにも…という具合にだんだん増えていきまして、現在では全国 50 か所、47 都道府県すべてに学習センターが設置されています。この長崎学習センターはそのうちで比較的早く、2 番目のグループでできたところでありました。かなり地域の意識が高かったということの一つの証だという風に思います。

私、今日は、飛行機で大村に降り立ちまして、バスでこちらへ参りました、お迎えとかがなかったものですから（笑）。窓から沿線を見ていますと、とにかく海と山だなという印象でした。私の生まれは佐賀県で、ご存知のように佐賀にも佐賀空港がございます。以前はよく面接授業の時などに利用したのですが、あのあたりはとにかくひたすら「平地」という感じのところでした。それで熱気球の国際大会が開催できるんですね。平地がたくさんあるということと、第二次産業やインフラ整備がそれほどでもないで高圧線の鉄塔がないということと熱気球大会をやるという、ちょっと悲しいような背景なのですが、それに比べると長崎県は山と海という感じがいたしました。考えてみましたら、放送大学が作られた一番の目的の一つに、遠隔地にいる人たちが誰でも高等教育の学習機会が得られるようにということがありましたので、そういう意味では長崎県は離島も多いですし、当初から放送大学の展開には非常に適しているところではなかったのかなと思う次第です。

ただ、これは反省になるのですけれども今まで放送大学の発想は、そうはいつでもやはり学生の方々は大都市中心に入ってこられるので、九州地方の所長の先生もいらっしゃいますけれども、入学されるのはやはり遠隔地にお住まいの方々ではなく、大都市の方々が中心です。これはやはり面接授業のこととか単位認定試験のこととかいろんな制約があって、どうしても遠隔地にいらっしゃる方は放送大学に行きにくかった、



入学しにくかったということがありました。

ところがこのコロナの中で放送大学も変わらなくてはいけないということで、あまり話すと次の講演のネタがなくなりますので、この辺にしておきますが、このコロナ禍はある意味で放送大学にとってはとてもいい機会だったと思います。本当に遠隔高等教育にふさわしいシステム、本当にふさわしい教育方法というものをこれから積極的に展開していかなければならないと思っています。山の中をバスに乗って周囲を見ながらそうしたことを考えさせられたのも何かのきっかけだったのかなという風に思っております。このことに関しましては、後ほどまた話をさせていただきたいと思います。

長崎学習センター開設 30 周年、本日はまことにおめでとうございます。



放送大学長崎学習センター開設 30 周年記念式典（祝辞）

長崎大学長 河野 茂

山下所長はじめ、職員の皆様、放送大学長崎学習センター開設 30 周年誠に
おめでとうございます。

山下所長や本日ご出席されておられる伊東前所長を始め、放送大学長崎学習セ
ンターの歴代の所長を、長崎大学で大変活躍された方が務められているというこ
とは大変ありがたく思っています。また、生涯教育を大学教育と関連を持ちなが
らさらに県民に広く提供されてこられたということに敬意を表したいと思います。

私がまだ若いころに放送大学の講義の収録のために東京に参りましたおりに、
撮影を控えて初めて顔にドーランを塗られて、テレビに出るときにはこのように
化粧してするのかというのが非常に大きなインパクトで驚きでありました。



最近、放送大学の BS 放送を見ながら思うのは、多様な内容でしかも数多く放送されていて、社会全体が
高齢化してくると、自分の専門でない分野の内容を学びたいなと思ってくる、そういったニーズもたくさん
あるということです。

岩永学長がおっしゃられたように、大学自体もコロナの影響で教え方が大きく変化しています。ご存じの
ようにこの 2 年間、今の大学 3 年生はほとんど、登学するチャンスも、色々な海外活動にも触れる機会もな
く過ごしてきてかわいそうでした。3 年目でやっと普通の大学生生活に戻りつつあるというのが現状です。

教員の側も変化を強いられました。対面での教育の重要性を感じた反面、時間と空間を超えた教育、特に
今回オンラインやハイブリッドによる授業を経験したことは、教室内で学生に対し板書だけの座学スタイル
しか取らなかった教員に対しては大きな変化を求めたのです。

私も多くの会議等をオンラインで行っており非常に便利です。本日、岩永学長は東京からお見えですが、
今では私が東京に行かなくとも東京とオンラインにつないで会議ができるわけです。ネットで済むのは本当
にありがたいと思うのですが、生身の顔を突き合わせることがないというのは、なんとなく心許なかったり、
失礼はないだろうかと小さな心の動揺を感じる時代になったと思っています。

教育自体も大きく様変わりする中で、ご年配の方も、ある程度の年齢の方も学び直し以外に社会が求める
実質的なニーズがあり、社会のニーズが非常に大きく展開していく中で放送大学が提供するさまざまな学習
の機会があるというのは、社会に多大な貢献をされていると思います。従って岩永学長や山下所長が、今か
らの時代に、さらに、長崎でどのような学習機会を皆さんに提供されていくのか、非常に大きく期待をして
いるところです。

長崎大学との連携も、資料を見ますと、沢山の教員が教育に参加参画していますし、また、学生も学び直
しといいますか、自分が得意でない分野についての学習を、放送大学が提供する科目を通じて学ぶというリ
メディアル教育の面で、放送大学を活用する機会が非常に多くなるのではないかなと期待しています。

是非とも今後とも皆さんとともに将来に向かい、さらに新しい形の放送大学のご発展を祈念しまして私の
挨拶とさせていただきます。

本日は本当におめでとうございます。

放送大学長崎学習センター開設 30 周年記念式典（祝辞）

長崎県教育委員会 教育長 中崎 謙司

この度、放送大学長崎学習センターが開設 30 周年を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

長崎学習センターにおかれましては、開設以来 30 年の長きにわたり、さまざまな年代や職業の方が、それぞれの目標を持ち、生き生きと学業に励むための環境づくりに努めてこられました。卒業生の累計は 1,000 名を超えております。

これもひとえに、歴代の所長様をはじめ、貴センターの教育に携わってこられた多くの教職員の皆様方のご指導の賜物であると、敬意を表します。

さて、我が国では、「人生 100 年時代」「Society 5.0」に向けて社会が大きな転換期を迎えており、生涯学習の重要性は一層高まっております。そうした中、貴センターにおかれましては、学生が、自らの計画に沿って、幅広い教養と高度な専門的学識や技能を身につけることができるよう、多種多様な領域の科目の中から自身のペースに合わせて学ぶことのできる環境を整えておられます。

また、県立長崎図書館や長崎歴史文化博物館とも連携し、魅力ある講座を開設されています。長崎歴史文化博物館で開催した公開講座「長崎の歴史から未来を考える」では、参加者の方から「専門的でありながら大変わかりやすかった。」や「郷土の歴史について知らなかった多くの点を学ぶことができた。」などの声が聞かれ、大変好評であったと伺っております。まさに、「各専門分野における学術研究を通じて新しい教養の理念を追求し、広く生涯学習の要望に応える」という放送大学の理念を具現化しておられると言えます。

長きにわたり、本県の生涯学習の発展にご尽力いただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

県としましても、「県民が生きがいをもって学ぶことができる学習環境の整備」を推進し、生涯学習社会の実現を目指しているところです。その取組の一つとして、県内で実施されている講座情報を一元化した、「ながさき県民大学」を設け、「いつでも、どこでも、誰でも」学ぶことができる機会を提供するため、県民の生涯学習の環境整備に努めております。

今後も、引き続き、放送大学の皆様方と連携しながら、県民の皆様へ学習の場を提供し、本県の生涯学習の更なる発展を目指してまいります。

結びに、貴センターにおかれましては、「誰でもどこでも、学びたい時に学ぶことができる」地域の身近な学習拠点として、県民への一層の学習機会を提供していただけることを期待するとともに、放送大学長崎学習センターの更なる発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



放送大学長崎学習センター開設 30 周年記念式典（祝辞）

NHK 長崎放送局長 山本 真人

放送大学長崎学習センター開設 30 周年、おめでとうございます。

この間の教養学部卒業者、大学院修了者は、あわせて 1,082 人にのぼり、県内の生涯学習機関の拠点として大きな役割を果たしてこられたことに、心からの敬意を表したいと思います。長崎大学をはじめ県内の大学関係者などと連携して、社会人や主婦、退職者などさまざまなバックグラウンドを持つ方々の、多様な知的好奇心や自己啓発の意欲に応えようと努力を重ねていることは、もっと知られてよいのではないかと思います。

さて、海外の研究調査によりますと、2007 年に日本で生まれた子どもの半数が 107 歳まで生きると推測されています。少し前に話題になったので、ご記憶の方も多いのではないのでしょうか。人生 100 年時代が、ここ日本で真っ先に現実になりつつあります。人生 100 年時代は、おのずと人生のターニングポイントが増えることを意味します。

70 歳、あるいは 80 歳になった時、社会でどんな役割を担うのか、ターニングポイントのたびごとに一人ひとりが主体的に学びなおすことは、生き方や働き方の選択肢を増やすものとして、ますます重要性を増すことになるでしょう。

世界的なコロナ禍の中で、海外の大学がオンラインの教育コンテンツを提供する動きが一段と加速しています。年齢や性別・国籍などに関係なく、インターネット環境さえあれば、誰もが、しかも場合によっては無料で最高水準の講義を受けることができるようになりました。こうした動きに乗り遅れまいと、日本の大学も続々とオンライン教育に力を入れ始めています。生涯学習を提供する学習機関の側も、人生 100 年時代、ポストコロナ、それにメタバースなどの急速な技術革新に対応するため、否応なく変化を求められているのです。

放送大学と同じように放送による教育を行っている NHK では、学びのニーズの変化を受けて NHK が制作するさまざまなコンテンツを「まなび」という視点で集め、発信する「NHK ラーニング」というネットサービスを 4 月から開始しました。お時間があるときに「NHK ラーニング」のホームページをぜひ開いてみてください。

こうした中、放送大学長崎学習センターは今後、どう変わっていくのでしょうか？

これについては、この後行われる放送大学の岩永学長の講演の中でビジョンが示されることでしょう。

長崎に愛着を持ち、長崎のことをもっと知りたいという地元の方々のニーズにきめ細かく応えていくことが、競争環境をしなやかにのりきる一つの鍵になるのではないかと思います。

NHK 長崎放送局としましても、放送大学長崎学習センターとの協力関係を強めていきたいと考えています。最後に、放送大学長崎学習センターの益々の発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



放送大学長崎学習センター開設 30 周年を祝す

第五代 長崎学習センター所長 崎山 毅

放送大学長崎学習センター開設 30 周年、誠におめでとうございます。

ご存じのとおり、長崎は、中国およびオランダとの関係の深い土地です。江戸時代の鎖国政策で長崎に設置された中国人居留地「唐人屋敷」を拠点としていた中国との関係は、今日の華僑の中華街や孔子廟、中国総領事館などにつながっています。また、江戸時代初期に長崎に築造された「出島」を貿易拠点としていたオランダとの関係から、今日に続く多くの遺産が生まれています。

江戸時代末期に、西欧近代科学技術導入のための教育機関「海軍伝習所」が長崎に設置されています。数年間続いた海軍伝習所では、オランダ海軍士官によって、蒸気機関学、造船学等と共に、数学、物理、化学等の基礎科学の教育が行われ、我国の海軍士官の育成にとどまらず、その後の科学技術の発展に寄与する人材の育成にもなったということです。海軍伝習所教官のうち、技術将校ハルデスと軍医ポンベは、伝習所閉鎖後も、数年間長崎に残留し、我国の近代化のために献身的な働きをしています。その結果として、我国初の洋式工場が設立され、現在の三菱重工に至っています。また、我国で最初の西洋式近代病院「長崎（小島）養生所」が設立され、長崎大学医学部の創立に至っている次第です。

ところで、長崎学習センターには、平成 4 年の開設当初、300 名余の方々が入学しておられました。そのうち、数名の方々、平成 25 年 3 月末の私の所長退任時にも、継続在籍しておられました。これらの方々の中の 3 名の方々、女性 1 名、男性 2 名の方々に、長崎の歴史につながる特徴を感じていましたので、簡単に、紹介させていただきます。

先ず、女性の方ですが、この方は華僑の子女で、華僑の一族に嫁いだ主婦であります。日本生れの日本育ちで、中国語を話せない中国人と自称しておられました。この方は、当時、長崎学習センター初で、唯一の放送大学名誉学生でありました。次に、1 人目の男性は、当時 77 歳の方で、入学当初から、科目履修生として在籍しておられました。この方は、長崎大学医学部のご出身で、医学部に務められた後、当時も医者として働いておられました。2 人目の男性は、当時 74 歳の方で、入学当初から、選科履修生として在籍しておられました。三菱重工長崎造船所の技術者であった方で、工学博士の学位と技術士の資格をお持ちで、当時も技術コンサルタントとして、国際的に活動しておられました。

このように、長崎が我国唯一の海外文化流入の地であった頃の唐人屋敷、出島、海軍伝習所等に由来する遺産、すなわち長崎中華街、長崎大学医学部、三菱重工長崎造船所にゆかりの華僑、医学者、工業技術者の方々が、長崎学習センター開設当初からの継続在籍者であることに、長崎ならではの歴史的な因縁を感じ、感銘を覚えたものでした。長崎学習センター開設 30 周年にあたり、改めて、忘れられない生涯学習者像としてご紹介し、貴センターの更なるご発展を祈念申し上げる次第です。

デジタル環境の進展と長崎学習センターの今後

第六代 長崎学習センター所長 東條 正

開設 30 周年おめでとうございます。私は 2013 年 4 月から 2019 年 3 月まで長崎学習センター所長として 6 年間勤務させていただきました。学習センターの業務も時代と共に変化しており、お聞きするところでは、今年度から単位認定試験が基本的に web での試験に変更されたようですが、それをお聞きして改めて感慨深いものがございます。

なぜかと言いますと、所長時代に最も気をつかった業務の一つが単位認定試験の実施でした。年 2 回、夏と冬に実施される単位認定試験は、実施時期が夏は台風シーズン、冬は積雪の時期と重なるため、天候次第で緊急の措置が要求されました。特に記憶に残っているのが 2016 年 1 月 24 日の 17cm の積雪の折のことで、当日は二学期の単位認定試験の初日で、積雪で交通手段がほとんど遮断され、私を始め職員の学習センターへの出勤や学生の皆さんの受験も非常に困難となる中で、試験の実施を行い、宅急便なども途絶する中で本部への答案の送付も行わなければなりませんでした。ですから今年から web での試験に変更されたことで、センターの実施上のリスクは大きく軽減されるのではないかと思います。

ところで、長崎学習センターにおいては、単位認定試験の web 化は試験実施時の困難さの解決以上に、放送大学での学習の普及においても大きな意味があると思われまます。

私が所長時代に、放送大学本部の理事長を勤めておられた白井克彦先生（元早稲田大学総長）が、長崎学習センターを視察に来られたことがありました。私が白井理事長に申し上げたのは、970 余という日本最多の離島を抱える長崎こそ、テレビやインターネットでどこでも受講できる放送大学がもっと普及してしかるべきだと思われるのですが、実際は離島部での学生が非常に少ない、特に対馬や壱岐はそれぞれ 3 万人の人口を抱えているにもかかわらず放送大学の学生がほとんどいないのですと御説明すると、白井理事長は、それは不思議ですね、なぜなのでしょうと仰いました。そこで、受講自体はテレビやインターネットで離島のどこでもできても、単位認定試験のおり離島から長崎市まで出てきて宿泊までしなければならぬ費用や時間の問題が大きなネックになっているのではないかとお答えしました。いつでもどこでも学べるという放送大学の強みが本当に発揮されるようになるためには単位認定試験の web 化が必要ですが、今の時点では、本人確認など技術的な問題もあり無理でしょうねというのが、その時の白井理事長と私の一致した結論となりました。

ですから、単位認定試験が基本的に web 化された今こそ、離島や僻地を多く抱えた長崎学習センターにとっては放送大学での学びの普及の好機とも考えられるのではないのでしょうか。もっとも web 試験も良い点だけではなく、学生さんの学習センターへの来訪が少なくなり、センターと学生の皆さんとの接触が希薄化することへの対応も必要と考えられます。最後に放送大学長崎学習センターの今後の益々のご発展を祈念致します。

私が放送大学で学んだこと

第七代 長崎学習センター所長・長崎大学理事 伊東 昌子

2019年4月から2年5か月間、放送大学長崎学習センター所長を務めました。就任してからの1年間は、放送大学を理解するための1年間であり、2年目から離職するまでは、おおかたは新型コロナウイルスとの戦いでした。

今となっては定着したオンライン授業ですが、コロナ感染症パンデミックの始まりを契機に、学生さんに役立つようにと試行錯誤で準備を進めました。あの時の苦労は今では懐かしく思い出されます。とにかく、センタースタッフ一丸となってセンター内のネットワークを整え Zoom に慣れ、活用方法を検討し、そしてそれを学生さんに伝えて覚えてもらう、その一心でした。PC 操作に慣れている学生さんばかりではなくて、丁寧なマニュアルを作ったつもりでしたが、質問の電話が次々とかかってくる、パスワードって何？ 大文字と全角文字は違う？ というような話から始めるような状況でした。それでも、ゼミや面接授業までには、リハーサルも終了し、なんとかスタートできたのは、学生さんの熱意もさることながら、スタッフの親切な指導の賜です。今でも頭が下がる思いです。学生さん自らで運営したオンライン同窓会総会まで、見届けられて嬉しかったです。

オンライン授業の反響は様々で、コロナ禍にわざわざ学習センターに行く必要がなくてよかったという声と、オンライン授業は一方的で面白くない、他の学生との交流ができない等々、賛否両論の感想が聞かれました。離島や半島の多い長崎県ですし、また子育てや介護に携わっていても自宅で授業が受けられるのは大きなメリットですので、対面授業ができるようになって、ハイブリットも継続していただければと思います。

長崎大学時代にはダイバーシティ推進に携わっていた私でしたが、放送大学でのダイバーシティの経験は特有でした。学生さんの背景・年齢、学習目的はもちろん、ゼミや授業で質問を受けると、「あっ、そんな風に受け止められたんだ」「そこが疑問か」等、数々な意外性にもダイバーシティを感じました。おかげさまで、経験したことのない世界を勉強したことに感謝しています。そして、年齢には関係なく新たな挑戦を続ける意欲、そこに生まれる自己達成感は人生を豊かにすると教えてもらいました。

無理を承知で客員教授をお願いした先生方にも大変感謝しています。当時の客員教授は、元長崎大学学長の片峰茂先生、長崎大学教育学部の堀内伊吹先生・加來秀俊先生、薬学部の西田孝洋先生、ICT 基盤センターの丹羽先生、医学部の永田康浩先生という充実した教授陣でした。私は本当に人に恵まれた幸運な人間であると思います。

片峰先生には、当初はセンター運営に助言をいただきたいと客員教授をお願いしました。長崎みなとメディカルセンター理事長になられてからも、コロナ感染症が勢いを増してきて多忙を極めておられたときも週1回はセンターにおいで下さり、学生に懇切丁寧にお話しされる姿を拝見して、言葉では言い尽くせないものを感じました。客員教授のみなさまには、お世話になりっぱなしで申し訳ございません。

コロナ感染症の影響で、学生さんとの交流が少なかったのは残念でした。そして結局は、所長として何か役に立てたという実感がなまま移籍してしまったことを、お許しいただきたいと思います。

いつも私を励ましてくれた学生さん、ありがとうございました。皆さんの夢が叶うよう、応援しています。

長崎学習センター開設 30 年を祝して

元長崎学習センター客員教授・

ノートルダム清心女子大学教授 杉山 博昭

私は平成 16 年 4 月から 20 年 3 月まで、長崎学習センター客員教員を務めさせていただきました。当時の本務校は長崎純心大学で、現代福祉学科で社会福祉学を担当しておりました。現在は学校法人長崎純心学園理事長をされている山田幸子先生が同じ学科の教員をしていた関係で、山田先生の後を継いで就任しました。

長崎純心大学では若い女子学生とばかり関わっていたわけですが、学習センターでは性別、年齢、職業など多様な学生が学ぶ場で、本務校とは違う刺激を受けることができました。お一人だけですが、卒業論文指導を担当したことがあります。その学生は、研究するという経験に乏しかったこともあって、論文作成に向けてかなり苦勞されていましたが、何とか完成して卒論として認められたことは大変喜ばしい思い出です。

他の客員教員の先生方は長崎大学教授をされていました。一つの部屋におりますので、いろいろとおしゃべりすることも多くあって、専門などが異なる方と親しくすることができたことも、自分自身の教育・研究を深めるうえでも有益であったと思います。

一般公開のセミナーを担当することもありました。参加者の方は、それぞれの期待をもってわざわざ時間や交通費を使って参加されるわけですので、それに応えうることをする必要があって、率直にいった負担感も大きかったですが、一般市民の方と触れ合うという貴重な経験もできました。

ちょうど現在地に移転するときでしたが、移転の式典では、一橋大学名誉教授で放送大学学長をされていた石弘光先生や、当時は参議院議員であった西岡武夫先生などがお見えになっていて、間近でお話を聞くことができたのは、幸運でした。

20 年 3 月で長崎純心大を辞して、岡山市にありますノートルダム清心女子大学に移り、長崎学習センターからも退くこととなりました。ここ数年は新型コロナウイルスにともなう行動抑制もあって、長崎に行くことが難しくなり残念に思っておりますが、長崎では西九州新幹線がようやく開業することとなり、長崎駅や浦上駅周辺の様子も変わってきたと聞いております。長崎から離れて感じるのは、長崎は独自の文化や気風のもとで一般市民の学術的な関心も高いことです。キリシタンの歴史なども長崎でこそ、しっかり向き合うことができることを痛感しております。地方の衰退が心配されておりますが、学習センターの活動によって市民の学ぶ場を広げていくことで、困難な状況を打開していけるものと考えております。学習センターの今後のさらなる発展に期待しております。

ある面接授業の思い出

元長崎学習センター客員教授・長崎大学名誉教授 杉原 敏夫

いま私の手元に一冊のバインダーがある。平成 25 年度の面接授業「職場におけるリーダーシップ」の計画書、実施シナリオ、学生への課題と回答、授業への感想などが一式バインディングされている。客員教授期間中での 4 回の面接授業のうち、もっとも記憶に残っているものである。

ご存じの通り、面接授業は 2 日に亘り、各日とも昼食を挟んで 90 分授業が 4 コマ、計 8 コマの時間が組み立てられ、担当者としてはかなりの準備と労力が要求される。したがって、「起承転結」を敷いた授業構成、内容の教授を前提とはしながら一方通行に終わらない授業展開、社会人受講生がまるまる 2 日間、参加して満足できる内容と達成感など、いくつかの面からやり方を周到に準備しておく必要がある。このようなことは、放送大学の教員の方々はずでに十分ご存じのことと思われる。

それまでは、自分の専門領域である「経営情報システム」、「経営品質評価」などを 8 コマ分構成して臨んだが、この回では、自分ながら少々挑戦的なテーマを真正面から扱い、事例や計量分析的な手法の裏付けを加えながら、受講者との知識の共有化と問題解決の手段の交流化を行おうと意図してこの面接授業を企画した。そしてそのことが受講者の反響を得たのみならず、私自身にとっても大きなインパクトを頂いたものと思っている。

構成としては、第一日の 2 コマをかけて、「リーダーシップ像とモチベーション」の紹介、後の 2 コマで現実の職場における生々しい実践例をビデオ学習（NHK プロジェクト X）を見てもらうことにより、その場に自らを投入してもらった。終了後、かねてから用意していた翌日の計量分析のためのデータをアンケート形式で、かなり細かく採集する。そして、その夜、翌日に向けてのアンケートデータの整理と分析に追われる。

翌日の開始時に因子分析をもとにした、昨日のデータの分析の結果を提示し、受講生の意識する「リーダーシップ像」の提示を行った。この方法は受講者自らのアンケートということもあり、受講者個々の多大な関心呼び、会場の雰囲気が昨日とは大きく変わり、自主性意識が急速に盛り上がってきた。

2 日目は因子分析の結果にもとづく受講者のクラスター化にもとづいた、グルーピングとグループディスカッションにより、自らの抱えている職場問題解決と理想とするリーダーシップ像についての発表と討論をおこなった。この状況に置いては、討論は白熱化し、私自身も思っけなかつたような「グループの自主的な問題発見と解決へのみちすじの考え」が自然発生的に湧き上がり、相互に自己啓発を受けながら、受講者や講師もろとも感激のなかで時間を惜しみつつ終了した。

その後の授業アンケートから見ても、この方式は展開面ではある意味での成果を収め、「苦勞のしがい」があったものと考えている。参加された受講者のその後を祈念したい。

放送大学長崎学習センター開設 30 周年に寄せて

元長崎学習センター客員教授・長崎大学名誉教授 浦田 秀子

放送大学長崎学習センター開設 30 周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。この 2 年半にわたる新型コロナウイルス感染症の感染防止対策で授業の在り方等多くのご苦勞があったかと推察申し上げます。1 日も早く日常を取り戻せること願うばかりです。

放送大学で学ぶということには「学士号を取得すること」「資格取得し、仕事に活かしたい」「興味のある分野を深く学びたい」などそれぞれに目指すものがあると思います。私が長崎大学医療技術短期大学部の教員時代、施設内に放送大学のビデオ教材が設置されており、卒業生や大学病院の職員が教材の借用、返却に行き来する姿を何度も拝見しておりました。学習センターとして 30 年、生涯学習を支え、地域とともに発展して来られましたことに心より敬意を表します。

上記のように私自身放送大学は非常に身近に感じておりましたところ、平成 27 年、28 年の 2 年間、学習センターの客員教授として教育の機会をいただきました。面接授業やゼミでは私の専門分野である「看護」をテーマとさせていただきました。看護は人々の健康に関わります。健康であることは誰もが望んでいることです。病気の発症のおよそ 8 割はその人の生活のありよう、つまり生活習慣に起因すると言われています。そこで、参加された学生の皆様には生活習慣を見直していただき、ディスカッションの中から生活習慣の実行可能な改善方法を探せたように思います。

公開講座では当時長崎大学大学院「災害・被ばく医療科学共同専攻（修士課程）」に所属しておりましたので「放射線」を取り上げました。放射線は今や医療の領域では病気の診断・治療の手段としてなくてはならないものです。しかし、2011 年の東日本大震災後の東京電力福島第一原子力発電所事故により人々は放射線に対して大きな不安と恐怖を抱くようになりました。参加者の皆様にとって、「放射線」のイメージは長崎・広島原爆による被害と切っても切れないものがありました。放射線の影響は遺伝するのか、がんになるのではないかなどの健康への不安です。長崎大学は世界で唯一、直接核兵器の被害を受けた大学として、国内外の放射線被ばくコホート研究・教育を進めてまいりました。長年にわたって積み重ねられた研究成果の蓄積は震災直後から現在も含め中長期的に復興支援を協働してきております。ご参加いただいた方とは被爆県民として、被害の実相を風化させないことを共有しました。

2 年間という短い間でしたが、面接授業、公開講座やゼミを通して人生観、生命観など参加者はじめ学生の皆様から多くの意見をいただき、私自身の学びでした。貴重な期間を過ごさせていただきましたことに感謝申し上げます。

これからも放送大学長崎学習センターに集う学生の皆様および地域のニーズの多様性に応え、益々のご発展と教職員の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

放送大学長崎学習センター 30 周年記念に寄せて

元長崎学習センター客員教授・九州大学名誉教授 稲田 俊明

長崎大学に新設された言語教育研究センターにセンター長として 2012 年に着任してまもなく、東條所長にお誘い頂き放送大学長崎学習センターで客員教授を務めました。前任校でも客員教員を兼務していた経験を活かして、専門分野の英語学、言語学、言語獲得研究の近年の成果を長崎学習センターでも分かり易く紹介したいと考え喜んでお引き受けしました。短い期間でしたが、私自身も学ぶことが多く、東條先生はじめ関係者の皆さまに、改めて感謝申し上げます。

公開講座や面接授業では、「ことばと心—多様性と規則性」、「言語の仕組みと英語の発想」、「ことばの獲得と言語研究」、「ことばから見る心の創造性」などのテーマで、身近な日本語や英語を例に解説しました。また少人数ゼミでは、「(文脈で変わる) 言外の意味」、「文字通りの意味と談話における解釈」などをテーマにして、近年の言語研究の知見に基づいて、小説、雑誌、映画、TVドラマなどからの実例を使って、“ことばと人間”について受講生の皆さんと一緒に考えました。

放送大学の意義の一つは、開かれた大学の利点を最大限に発揮できることだと思います。公開講座は、市民と地域全体に開かれた“学びの場”を提供するものですが、年齢や個別の大学の壁を越えて自由に学ぶことができます。ここ数年の間、市民向けの講座などを担当する機会があり、その経験から学んだことがあります。それは、公開講座だけではなく単位履修生向けの面接授業でも、特定の科目に狭く限定せず、講師の専門分野と関連した一般的なトピックについての講義も提供できると、講義内容の面でも今一層“開かれた大学”になるのではないかということです。例えば、現役を退いてから市民講座などで取り上げたテーマで、「英語のユーモアと逆転の発想」、「英語の発想と日本語の発想」、「新しいアイデアはどこから来るのか」なども、特定の専門科目ではありませんが、既存の学問分野の枠を超えて興味を呼ぶもので、Open University のテーマに相応しいのではないかと思います。

学習センターは人と人の交流の場でもあります。そこにはオンライン授業やリモート式講義を補うような学びあう仲間との交流が生まれます。また、放送大学では様々な経歴や背景を持つ人達との交流ができる利点もあります。そのような、ある意味では「異分野間の人的交流」は、受動的になりがちな脳に刺激を与え再活性化させます。私自身の体験では、MIT (マサチューセッツ工科大学) で研究している頃、様々な職種で働くボストン在住の日本人から誘われ、“異分野交流の集い”によく出ました(米国の優れた大学では、日本の閉鎖的な大学環境に比べて、専門領域を超えた学内外の人的交流が盛んです)。そこでは、宇宙ゴムの研究者、脳科学の専門家、ハーバード大学の剣道部顧問などとも交流する機会があり、予想しない体験談、特に失敗談から、異分野交流の恩恵にあずかったことを思い出します。

学習センターの対面授業や少人数ゼミも、学ぶ仲間同士の交流に繋がります。吉成 (2012) 『知の逆転』(NHK 出版新書) のなかで、言語学者の N. チョムスキーは次のように述べています;「… (優れた) 大学では、授業に出てノートを取り、それを試験で再確認することは一切期待されていない。… 期待されるのは教授の言うことに挑戦できることや、他の人と協力して創造的な仕事をすることである…」。長崎学習センターの少人数ゼミは、このような意味でもよい試みであり、ぜひ続けて欲しいと思います。

最後になりましたが、長崎学習センターの益々のご発展を祈念いたします。

混沌の時代に在って学び続けること

元長崎学習センター客員教授・

地方独立行政法人長崎市立病院機構理事長 片峰 茂

私は、2019年8月から2021年3月まで放送大学長崎学習センターに客員教員として勤務しました。短い期間でしたが、普通の大学では得ることのできない貴重な経験をさせていただきました。とくに、第一線を退いた高年齢層を中心にした社会人学生の皆さんの学修意欲、新しい知に対する好奇心の強さに大きな感銘を受けました。人生を通して学び続けることの意味を再認識することができました。これまで30年にわたって、地域の社会人に学びの機会と場を提供し続けてきた長崎学習センターの業績に敬意を表したいと思います。

2020年初に世界に伝播した新型コロナウイルスは、その後断続的に流行を繰り返し、2年半が経過した現在も終息を見通すことができません。3密回避が強調される中、情報技術が急速に普及し、様々の日常が覆されつつあります。そして、本年2月、ウクライナで戦争が勃発しました。核兵器使用や原発破壊攻撃などの核危機を孕みながら、戦争は長期化の様相を見せています。国連を中心に戦後75年以上にわたって維持されてきた世界秩序の脆弱性が白日の下になったとあってよいでしょう。

地球温暖化による気候変動など地球・人類の持続可能性に黄信号が点りだす中でのコロナ流行の急拡大とウクライナ戦争は、様々な社会的課題や不条理をあぶりだし、グローバル資本主義の基盤を突き崩しつつあります。人口減少のトレンドの中、食糧、エネルギー、サプライチェーンを外国に依存する我が国は、とりわけ大きな経済的困難に直面する可能性があります。

要するに、既存の価値観が急速に陳腐化し、世界は混沌の時代に突入したと言ってよいと思います。いずれ新しい価値観を世界が共有できる時代が来るかもしれませんが、それまでは全ての人々が知恵を振り絞り不確実性の社会と折り合いをつけ新時代に向けて準備する必要があります。そのためには、学び続けること、考え続けること、そして挑戦し続けることが必要です。遣隋使・遣唐使の時代、長崎出島の時代、明治維新など長い歴史を通して日本人に先駆的に刷り込まれてきた「学ぶ力」の真価が、問われることとなります。データサイエンスや先端医療など新しい知識を学ぶとともに、混沌の時代であるからこそ、歴史や哲学などの人文知を学びなおし、改めて時代を鳥瞰し人間を考え、未来を展望する必要があるように思います。

これまで以上に、全ての国民が生涯学び続けることのできる環境の整備が求められます。放送大学の役割はとても大きいのです。学びの様式は多様です。個人的には、これまでの本部が提供する放送授業中心の学びから一歩を踏み出し、長崎学習センターが自由に創意工夫をしながら、地域の社会人とともに新しい独自の学びを創造すべく奮闘されることを期待したいと思います。

2021年の夏、放送大学で共有した「未来の健康」

元長崎学習センター客員教授・長崎大学教授 永田 康浩

放送大学長崎学習センターの開設30周年、おめでとうございます。私は2019年と2020年に面接授業を担当し、2021年は客員教授として2回のゼミと公開講座を開講させて頂きました。正直に申し上げて、それまで放送大学の名前こそ耳にしたことはあったものの、その内容については未知でした。今更ながら、非常に多彩な教育プログラムを拝見し、放送大学の活動と生涯学習に対する社会のニーズを肌で実感できことは私にとっても貴重な経験となりました。ちょうどコロナ禍と重なり面接授業やゼミがオンラインになりましたが、かえって放送大学の強みが活かされたのではないのでしょうか。日頃、使い慣れないスマホやパソコンを駆使しながらオンライン授業に参加する受講生から、学びに対する好奇心と熱意を画面越しに感じました。これまで授業を聴講して下さった皆さまに改めて感謝いたします。

この機会に、3年間の私の授業を通じて常に背景にあった「健康」の思いを書き記しておきます。

これまで医師として多くの疾病に立ち向かうなかで、「健康」についての私なりの想いがありました。しかし今、社会が関心を寄せる地域包括ケアシステムにおいては、「健康」を実現するには医療の枠を超えて取り組まなければ解決できない課題が多く、自身の無力を感じる事が少なくありません。もちろん「医療」が大きな柱であることに違いはありませんが、「病気か、病気でないか」で健康を棲み分けることができない時代に私たちは突入しているのです。これからの高齢社会や共生社会では、さまざまな疾病や障害を持ちながらもみんなが健やかに生活できる社会に向かわなければいけません。「健康とは身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病や障害がないことではない」とするWHOの定義も我々の解釈を改めていく時なのかもしれません。少なくとも健康の定義を外れたら不健康ということではなさそうです。2021年夏の私のゼミでは、東京パラリンピックにおける躍動感あふれるアスリートの活躍を目の前にして、障害イコール健康の障壁ではないことをゼミの皆さんと共有することができました。

新型コロナウイルスの出現により、われわれは疾病と健康の境目が極めて曖昧であることに気づかされました。健康の定義は時代とともに変化するようです。しかし、健康を享受できる人間らしさだけは失いたくありません。その原動力は健全な好奇心、すなわち学習する意欲にも宿ることをこの時に気づかせてもらいました。

放送大学長崎校の10年後、40周年の時にはどのような健康観が広がっているのでしょうか。その時にもみんな健康を語り合えるような社会でありたいし、変わらぬ好奇心を持って生涯学習を続けていきたいものです。

放送大学長崎校の今後の発展を祈念します。

放送大学長崎学習センターと共に成長

放送大学長崎学習センター客員教授・長崎大学教授 西田 孝洋

放送大学長崎学習センターが30周年を迎えたことにお慶び申し上げます。私が長崎大学薬学部・大学院医歯薬学総合研究科に赴任したのも、ほぼ同時期（1991年）となります。私は、浦元センター長の依頼で、面接授業「DDS：薬物送達システム」を2008年に担当して以来、放送大学長崎学習センターに関わらせて頂いています。長崎大学の学生と比べて、放送大学長崎学習センターの学生さんは非常に勉強熱心で、質問も活発で、学びに対する真摯な態度に感動を受けたことが強く印象に残っております。その後、崎山元センター長から誘われ客員教授を務めて、もう少しでのべ10年間となります。

当初は、自身の研究専門領域（薬物送達システム、薬物動態学、薬物相互作用など）の話題で、面接授業、公開講演会、ゼミを何とか切り抜けてきました。しかしながら、ネタ切れの状態が危惧されましたので、私も学び直しの良い機会と思い、本来興味を持っていた関連の領域を勉強し直しました。まずは公開講演会の1コマの講義コンテンツに仕上げていきました。具体的には、「わかりやすい統計と確率」、「身近なクスリの歴史」、「からだの抵抗性」、「アルコールと肝臓の話」、「ストレスと疲労の科学」、「科学分野におけるセレンディピティ：失敗から学ぼう」、「エネルギー代謝の不思議」という様々な分野の講義コンテンツを作成できました。さらに発展させて、「薬と毒：表裏一体の科学」、「からだと病気のしくみ」、「生物統計の基礎と実践」の面接授業を実施できました。最近では、歴史物に挑戦し、長崎、薬草、医薬品などの歴史に関して講義コンテンツを作成しているところです。一方、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンラインツールを用いた遠隔授業やオンデマンド形式の教育が大きく進展しました。今後は、対面とオンライン・ハイブリッドを巧みに融合した教育方式が広く展開していくものと推測され、放送大学長崎学習センターを通じて蓄積した講義コンテンツの上手な活用方法を考えています。

このように、私は放送大学長崎学習センターと関わることで自身の見聞を広く深めることができたため、放送大学長崎学習センターと共に成長してきたと言えます。最後に、放送大学長崎学習センターの今後のさらなる発展を祈念したいと思います。

自由に、気ままに、凜として！

放送大学長崎学習センター客員教授・長崎大学教授 堀内 伊吹

「今日の授業、とてもいい時間でしたよ。ありがとうございます。」長年、学部や大学院で教えていても、授業終了後にこのような言葉を頂戴することはまずありません。放送大学でゼミや面接授業を担当させていただき、後片づけをしていると、ありがたいことにわざわざこのような言葉をかけに来てくれる受講生がいます。そしてその受講生の多くが、私と同世代、あるいは私よりも先輩の方々なので、なおさらひと言が身に沁みます。この度は、放送大学長崎学習センター 30 周年、おめでとうございます。

私が信州松本で過ごしていた子供時代、「大学」という言葉は、不思議な響きを持っていました。憧れ、未知、緑の木々に囲まれた静謐な別世界。バスでその大学の建物の横を通ると、どこからともなく緑の香りがして、レンガでつくられた古びた門は、不思議な世界への入り口のように思えました。

高校まで信州で過ごし、東京の大学で学び、長崎大学で長年勤め、そして放送大学長崎センターの客員教授の機会をいただきました。教育学部に勤務しながら、いまだになじめない言葉の一つが、「学び」という単語。お勉強、学習では何故いけないのか。実技の世界で多くの場合は、学びというよりは、お稽古、レッスン、伝授であり、如何にして「型」を修得するかという事が基本です。放送大学の授業では、学びという概念を持ち込まず、できるだけ音楽を言葉で語り、伝えたい内容を音で表現することを心掛けました。専門用語に頼らずに、できるだけ神髄に迫る。充実した時間でした。

私の経験から、エピソードをふたつ。数年前の面接授業での出来事。2日連続の授業で、クラシックの名曲を集め、作品について解説をして、演奏も行いました。熊本からの参加された私とほぼ同世代と思われるその受講生は、初日が終わった時、私のところにやって来ました。「久しぶりにピアノ曲をたくさん聞いてうれしかったですよ」と。そこで、熊本からの受講生ですので、いったんお帰りなるのですかと伺ったら「今日は、長崎に泊まります。主人も来ているので、二人でこれから晩御飯。先生、おすすめのお店はどこかありますか?」と。その笑顔は爽やかで、素敵だと思いました。もう一つ。それは先日行った公開講座。その日は蒸し暑い7月末の午後でした。私よりも先輩のそのご婦人は、品の良い和服を身にまとって、頷きながら凜とした姿勢で講座を聞いてくださいました。そして一言、「今日も楽しかったですよ」と。私も思わず背筋を伸ばしました。

放送大学での授業は、講師である私たちがある意味で人間力そのものを試される場でもあります。そしてそこで行われている授業は、学びという言葉では片付けることができない、多様で多彩、そして人の心に深く根差した行為であるような気がしている今日この頃です。

放送大学長崎学習センターとの関わり

長崎学習センター客員教授・長崎大学准教授 加來 秀俊

長崎の放送大学で思い出すのは、多良見町に学習センターが開設されていたことです。30年前は活水女子短期大学に勤務していたのですが、長与から琴の尾岳を経由して大草方面に向かうと白い立派な建物があり、放送大学の文字が目飛び込んできました。こんな場所に放送大学の学習センターがあるのだ、というのが当時の印象でした。長崎学習センターも長崎大学のキャンパスに移転して来ましたが、全く関わり合いを持つ機会はありませんでした。

そんな中、突然、面接授業の担当依頼が舞い込んできました。心理学の授業を何か担当してほしいということでした。その時は、活水も短期大学が廃止となり活水女子大学の文学部人間関係学科に移籍しており、数多くの心理学関係の授業を担当していました。それで、「認知心理学」だと色々な話ができるのではないかと引き受けたのです。これまでは、若い女子大学生を相手に講義していたのですが、放送大学では老若男女、まさに年齢・性別を問わず多くの受講生が待ち受けていました。年配の学生に講義する経験はなかったので、戸惑いもありましたが、何より学ぶことに対する学生の“熱意”には驚かされました。放送大学の学生は、実体験に基づいてさまざまな質問を投げかけてくるのです。でも、一緒にいろんな問題について考えてみるということで、楽しい時間を過ごすことができました。その後、また面接授業の依頼があり、「感情心理学」をテーマに実施しました。続いて「心理学実験」も担当することになりました。そして、活水女子大学を定年退職。退職後に長崎大学教育学研究科で特任准教授としてお世話になることとなり、併せて放送大学長崎学習センターの客員教授となりました。

客員教授となると、毎週一定の勤務時間があり、学生の学習相談等が入ってきます。また、1学期と2学期にそれぞれゼミを担当します。心理学のテーマを設定して一緒に考える機会が与えられました。さらに、1年に1回公開講座が開かれるので、講演のテーマを決めてお話をさせていただきました。臨床心理士コースの大学院の入試監督をしたことがきっかけで臨床心理学コースの大学院入試対策講座を開き、数名の熱心な受講生と一緒に心理学の基礎から学ぶ機会を持つことができました。臨床心理学コースの大学院合格者はいなかったのですが、勉強会が公認心理師勉強会へと発展して、放送大学の学生さんが数名公認心理師試験を受験することになりました。ともに学んだ学生さんが何人も公認心理師の資格を取得できたことは、私にとっても大きな喜びとなりました。

生涯学習が叫ばれますが、放送大学の学生さんとの関わりによって、実践的な生涯学習に触れる機会を与えられ、大いに刺激を受けることができました。長崎学習センター開設30周年ということですが、これからも地域の人たちが学び続けることができるベースとなり、ますます発展していくことを祈念いたします。

長崎学習センター開設 30 周年を祝して

長崎学習センター客員教授・長崎大学教授 丹羽 量久

このたびは、放送大学長崎学習センターの開設 30 周年を迎えられたことに心からお慶び申し上げます。

私が放送大学と関わりを持ったきっかけは、当時の東條 正所長から面接授業を要請されたことでした。「情報」分野の面接授業が少ないことを憂慮なさっておられたので、平成 30 年度の第 1 学期と第 2 学期にそれぞれ 1 科目ずつ開講しました。その翌年度に客員教授として招かれ、現在に至っています。私が長崎大学に転籍したのは平成 18 年 10 月で、文教キャンパスの総合教育研究棟に最初の研究室を用意してもらいました。長崎学習センターが現拠点へ移転した平成 19 年 4 月までの半年間、短い期間でしたが同じ建物にいたことは、思い起こせば、何かの巡り合わせだったのかもしれない。

日頃から、学生さんたちのサークル活動が盛んに行われていることが伝わってきます。平成 4 年 4 月の開設以来、地域の拠点として生涯学習を継続的に支援されてきた存在は、失われがちな地域コミュニティーの活発化への貢献にも繋がるものであり、数多くの方が恩恵を受けてきたことは容易に想像できます。私も現役を引退したら、こうした学生間交流の場に混せて欲しいな、と思っています。また、長崎学習センターの 4 階の廊下には、学生さんが描いた絵画や制作したポスター等が掲示されています。適度な間隔で入れ替えが行われ、心がこもった作品ばかりなので、見とれることがあります。たまに結構大きなサイズの作品があったりして、完成への困難さを想像すると驚くばかりです。

さて、面接授業やゼミでは数多くの学生さんと関わることができます。社会人を経験なさった方がほとんどなので、長崎大学とは一風違った雰囲気を楽しめます。コロナ禍により、一時期は対面での交流が不可能でしたが、そろそろ学生さんとのなごやかな雰囲気を楽しめるようになりつつあり、期待が膨らみます。中にはとても熱心に学習に取り組まれる学生さんがおられます。そうした学生さんからニーズをうかがって、次のゼミのテーマの参考にしたり、翌期の面接授業の内容に反映させたりしています。

客員教授は長崎学習センターの機関誌に連載記事を投稿します。その中で花田裕子先生は放送大学の学生さんたちの学ぶ意欲に心を動かされたと述べておられ、自分と同じことを感じておられるのだと嬉しく思いました。そこで、学生さんたちの日々の生活や学習に役立つと考え、数年前から取り組んでいる研究テーマに関係した「メタ認知」を記事に取り上げたことがあります。面接授業やゼミではわずかな接点ですが、学生さんが自身の思考や学習のマネジメント能力が高まるような活動に導いていけたら幸いです。

末筆ながら、放送大学および長崎学習センターのなお一層のご発展と関係者の皆様のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

放送大学長崎学習センターと人生 100 年時代

長崎学習センター客員教授・長崎大学名誉教授 宮原 春美

放送大学長崎学習センターが開設 30 周年の節目を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。私は昨年 9 月に客員教授になったばかりですが、その前にも面接授業を何年か担当しており、学生の皆さんの学習意欲の高さにいつも刺激を受けておりました。この度、客員教授を拝命して卒業研究指導、ゼミナール、面接授業、公開講座を担当するにあたり、学生の経歴や入学動機を考えるとこれまでの自分の専門領域（助産学、思春期学、発達障害看護学）を少し広めて講義やゼミナールの内容に盛り込む必要があると考え、私自身も日々学習しているところです。

まず卒業研究指導では看護職の学生の研究指導をしているのですが、私の臨床・研究経験歴と全く違う分野の研究テーマを考えておられ、研究テーマを絞り込む過程において私もそのテーマについて一から学習しなおしました。学生の関心が大きく、また短い研究期間で達成可能でありながらも、研究初学者として臨床研究のプロセスを一通り経験できるように研究テーマを絞り込み、11 月の報告書完成に向けて学生とともに頑張っているところです。

またゼミナールにおいては、受講者の年齢が高く男性の学生もいることもあって、「人生 100 年時代を生きる」というたいそうなテーマを掲げディスカッションを交えながらやっていますが、毎回時間が足りなくなるくらいの活発なゼミナールになっています。

人生 100 年時代とはロンドン・ビジネス・スクールのリンダ・グラットン教授が「LIFE SHIFT 100 年時代の人生戦略」の中で提唱したもので、寿命の長寿化によって先進国では今後 100 年生きることを前提とした人生設計の必要があると述べています。そして人生 100 年時代を生きるためには「スキルの習得、常に自分を見直す、広い視野をもつ、老後の暮らし方を考える、個人の資質を磨く」必要があると言われていています。

特に「個人の資質を磨く」ためには、心身が健康であることはもとより、何かを学び続ける姿勢、生涯教育制度や学習システムが重要と言われていています。また多彩なコネクションが必要であり、自分のネットワークの中に異なるタイプの人たちがいることは人生の在り方を考える良いきっかけとなるともいえます。放送大学で学び続けることは「人生 100 年時代を生きるために必要な力」として、大きな意義があるのではないかと考えます。

放送大学 長崎学習センターが学生の様々な学習ニーズにこたえる場としてこれからも大きな貢献がなされ、益々ご発展されることを祈念しております。

放送大学長崎学習センター開設 30 周年に寄せて

長崎学習センター客員教授・長崎大学名誉教授 山下 樹三裕

放送大学長崎学習センター開設 30 周年誠にありがとうございます。私が長崎学習センターと最初に関わらせて頂いたのは、平成 15 年冬の集中講義（面接授業）でした。当時長崎学習センターはまだ大村湾沿いの多良見町にあり、長与町からの細く曲がりくねった道をまだかまだ着かないのかとやや不安になりながら車を走らせた記憶があります。土・日の丸 2 日間連続で授業を行うことはそれまでに経験がなく、その事も私を不安にさせていた要因であったのかも知れません。しかし、その不安も授業を始めるとすぐに解消されました。授業を聞く皆さんの熱い（圧？）眼差しが私に降り注いでいるのを感じたのです。集中してしっかり授業を行わなければ皆さんに失礼にあたると思いました。授業は、あっという間に終わった気がしました。後でどっと疲れが出ましたが、気持ちのいい疲れでした。次は、2 年後の平成 17 年長崎大学キャンパス内の総合教育研究棟に学習センターが移っていた時で、3 度目は、長崎大学附属図書館裏に新校舎を設立した後の平成 20 年の時です。何と私は長崎学習センターが辿ってきたそれぞれの地で、授業を行ってきたのでした。それを知ったのは、今年私が放送大学の客員教授になった後のことで、やや驚くと共に感慨深いものがありました。いずれの時もそうでしたが、放送大学に来られる学生の皆さんの熱心な授業態度と質問をたくさん頂いたことが記憶に残っています。

約 2 年半前から始まったコロナ禍は、人々の暮らしを一変させました。教育の場も大きく混乱しました。今ではリモート授業が当たり前に行われ、対面授業でも人数制限を行い、試験の様式までも変わってきています。後遺症により登校できなくなってしまった人もいます。その中で、自分が学べる時間を自由に設定できる放送大学の存在意義は益々大きくなってきています。また、近年社会情勢は刻々と変化し、IT の進展はその変化をさらに急速なものにさせています。情報化社会、グローバル化と言われて久しくなりますが、長崎学習センターが開設された当時（30 年前）、まだ携帯電話はあまり普及しておらずポケットベルが使われていたのが、今やスマートフォンを操作して様々なことが行える時代となっています。この時代を生きていくのに、リカレント教育の重要性も今後益々認識されていくのではないのでしょうか。この時代を生きる人々の支えとなります様に、放送大学長崎学習センターの今後益々の発展を祈念致します。

放送大学長崎学習センターでの思い出

元長崎学習センター事務室長 鳴海 幸雄

長崎学習センター開設 30 周年誠におめでとうございます。

平成 19 年 4 月から平成 21 年 6 月までの 2 年数か月の放送大学長崎学習センター勤務は思い出に残る貴重な体験の日々でした。

平成 19 年 4 月に採用されてから最初の仕事は 5 月の長崎大学総合研究棟から長崎大学付属図書館との合築棟への移転でした。採用されて 1 か月での大仕事は目まぐるしい日々でしたが、合築棟 3、4 階に新しくできた長崎学習センターに移転が完了した時は、これまでの借家住まいから真新しい 2 階建ての新築の住居に引っ越した気分で、職員はもとより学生の皆さんの喜んだ笑顔が今も目に浮かびます。

次の思い出は、放送大学を多くの長崎県民の方に周知させるための広報活動です。今みたいにテレビやラジオを利用した広報はなく、各学習センターが知恵を絞って独自の広報活動を行っていました。長崎学習センターでは、県庁及び長崎県内の市町村役場、図書館、県立高校、看護専門学校等を訪問して、ポスターの掲示及びリーフレットの配架をお願いしたり、新聞への折り込み、ポスティング、各種機関誌への掲載依頼等さまざまな方法で広報活動を展開した体験も今となっては貴重な思い出として懐かしく思います。

長崎学習センターに来て、驚いたのは高齢者の方が頑張っておられることでした。平成 4 年の設置当時から学んでおられる方もたくさんいて、学位取得や生涯教育として熱心に学習されている姿に「学びに年齢は関係ない。」と感銘を受けました。様々な機会にそのような学生さんと話す機会があり、「若い時は戦争でろくに勉強出来なかったので、今は勉強できるのが楽しくて仕方ない。」「サークル活動もでき、研修旅行等もあり仲間が増えて楽しい。」等それぞれに学生生活を謳歌されていました。グランドスラムを達成した学生も誕生して学習意欲の高さに感心したものです。また、面接授業の受講態度も熱心で勉学意欲も高く、担当された先生方からも「学習熱心で質問もよくされ、教え甲斐がある。」と言っておられたことを思い出します。

その他 NHK ホールでの学位授与式、九州内の絆を深めた所長・事務長会議、初めての土日勤務等長崎学習センターでの貴重な体験、思い出がその後の人生の大きな糧になっています。

学習センター開設 30 周年に感謝

元長崎学習センター事務長 佐藤 三郎

(1) 長崎学習センターと地域社会

長崎学習センターは、諫早市多良見町を経て長崎大学キャンパスの一角に設置され 10 年以上が経ち、面接授業、単位認定試験、学生サポート等を行ってきました。ここ数年、コロナウィルスの感染拡大により、試験・面接授業の形態が IT 化される部分もあり、高齢者には取り組みにくい面もあるようです。現代は、高齢化社会と高学歴社会が並行して走っているようです。長崎学習センター所属の卒業生が 1,000 名を超えました。学生自身の努力は基より企業・地域社会、家族の協力等、画期的な数字だと思えます。

(2) 学生募集について

高齢化社会、高学歴社会の到来及びコロナ感染により学生募集は難しい状態ではないかと思えます。ニーズに合った授業科目の新設や宇宙、気象、看護・介護等、希望を投げかけてくれる科目。放送大学での「学位取得」の夢。学生募集に長崎県の島々を訪問した日々。「放送大学はアナウンサーをつくる大学」と言われている話は聞いていましたが、その言葉を実際に聞いた時「やっぱり噂は事実」だったのだ。高等教育（大学・専門学校等）進学率が 60% を超える今日、放送大学の役割は？アメリカでは、高等教育機関で学ぶ者は年齢に関係なくリピーターして学んでいると聞いています。日本は高齢化社会に入り勤労年齢は 70 歳まで伸びています。放送大学では、学生年齢の上限がなく高齢の人も多数学んでいます。全国の各県に学習センターが設置され図書・視聴学習室も用意されています。しかし、学習センターに学生駐車場がなかったり、離島で交通の便が極端に悪く泊りがけで試験・面接授業に来る学生の存在もあります。学ぶ姿は年齢に関係なく学生の眼は輝いています。学位も複数回取得する学生もいます。私（75 歳）の年齢よりも高く経験も知識も豊富な学生が高いレベルの知識取得を目指して学習しています。放送大学は生涯学習の担い手として期待されています。レベルの高い授業内容。放送大学に在職・在籍出来て感謝です。学ぶことの多かった「放送大学」。次世代は、放送大学学生が溢れる時代になって欲しいと思えます。

(3) 長崎学習センターと東日本大震災

2011 年 3 月 11 日、放送大学本部より「大丈夫ですか！」と主語も述語もない震災一報。直ちにテレビのスイッチを入れると「津波」が海の彼方から押し寄せ道路・畑・住宅・車を飲み込んでいく映像が映し出されました。それは、映画を見ているようでした。津波予想では長崎も津波が起こる可能性があり、閉所し学生・職員に帰宅してもらいました。関東以北は、地震と津波による大災害が起っていました。震災に伴う募金は、長崎学習センターも僅かながら参加させて頂きました。

放送大学長崎学習センター開設 30 周年に寄せて

元長崎学習センター事務長 宮原 俊夫

放送大学長崎学習センター開設 30 周年おめでとうございます！

2013 年 4 月放送大学学園本部で長崎学習センター事務長を拝命、事務長研修を受講後、5 年間の長崎学習センターでの勤務が始まりました。

学習センターの課題は、入学生数の増、学生生活相談における適切・丁寧な窓口対応、地域連携・社会貢献の推進でした。当時学生数が年々減少傾向にあったため、いかにして入学者数を増加させるかが当面の課題でした。

長崎学習センター開設 20 年を経過した当時でも知人等に放送大学についての印象を聞くと、放送関連の技術者等の養成のための学校との返事が返ってくる程度の認識でしかありませんでした。改めて私達の広報活動がいかに貧弱で不親切であったことを思い知らされるところでもありました。

そのため私達は、広報担当職員を中心にいかに効果的な広報を行い学生募集活動に繋げていくか頭を悩ませる毎日でした。

放送大学の特色である『いつでも、どこでも、だれでも』そして『何歳になっても』を社会一般の人に周知するために全職員手分けして長崎県内を車で廻り、壱岐・対馬・五島などの離島は所長を先頭に関係各所を訪問し、祭り等があれば出店するなど広報活動に奔走しました。また、TV・ラジオ、新聞広告をはじめ放送大学ホームページの「大学の窓」に長崎学習センターの特色ある面接授業「五島灘洋上実習」を取り上げてもらうなど色々と手を尽くした結果、何度か学生数増に伴う学長表彰を受けましたが、本当のところ学生増につながる効果的な広報活動は見つかりませんでした。

一方、学生生活の窓口としては、同窓会、学友会を始めとする各サークルの学生の方々との連携・協力により研修旅行などいろいろな学習センター行事を進めることができたことに感謝しています。

最近ではコロナ禍で学生の方々と直接話す機会が減ってきているように感じますが、当時は事務室の窓越しではありますが気軽に声をかけていただくなど対面で情報交換等ができたことが楽しい思い出となっています。

高齢化社会が進み、今では「人生 100 年時代」と言われる中、また多種多様な学生の対応やインターネット教材の活用等学習環境が変化していく中、生涯学習機関である放送大学にとっては、その役割を果たせる要素を十分に備えており、社会からの期待は大きなものとなると考えます。

社会の人たちの学びたい意欲を支え、時代が求める学びに応える学習センターとして今後ますます発展されますことをお祈りいたします。

放送大学に関する仕事の思い出

元長崎学習センター事務長 山崎 雅彦

私は、放送大学に関する仕事に携わったことが2度あります。

1度目は、今から約40年前の26歳の時、昭和58年4月、文部省大学局高等教育計画課放送大学系の係員として配属になりました。この時期は、放送大学が設置され、昭和60年4月の授業開始（初放送）に向けて、本省、放送大学学園、放送教育開発センターが一丸となり、大事業を成し遂げようと、熱気に溢れ、計画の遅れが許されない緊張の中がありました。

本省の専従スタッフは、企画官、係長、係員の3名体制で、他省庁との連絡調整、特に、運営費、人員の要求が重要な仕事でした。通常の大学設置の準備経費に加え、放送事業に関連して、日本電波塔（東京タワー）に放送機器を設置するための経費などの運営費、放送の運行要員などの人員要求を行いました。財政当局への予算要求では、経費の必要性、根拠となる資料の提出、説明を経験し、折衝スキルを学ぶことが出来き、係員として貴重な3年間を過ごすことが出来ました。

2度目は、平成30年3月末で長崎大学を定年退職した後、4月から放送大学長崎学習センター事務長に就任しました。

事務長として、思い出に残る仕事は、学部学生の単位認定試験の実施でした。事前準備として、教科ごとの試験会場設定、配慮すべき学生への対応、監督者・監督補助者の人選、10名ほどの補助者への実施要領の説明、会場設営などを行い、本番に臨みました。当日は、監督者として実施要領に基づき、時間配分間違いがないよう注意しながら進行了。また、事務長としては、答案用紙が間違いなく回収されているか、1枚1枚確認の上、科目ごとに封筒づめを行いました。この試験期間中は、問題が発生しないよう細心の注意を図り、答案用紙が本部に届くまでは気が抜けませんでした。期間終了後の反省会では、緊張から解放され、安堵感でいつも以上にお酒が進んだことを思い出します。

その他、センター職員が学生に同行する面接授業の「五島灘洋上実習」は、受講者の希望が多く、毎回抽選になっていました。長崎大学の練習船に乗船し、三重漁港を出港、観光地で有名な端島（軍艦島）を見ながら旋回、最終的には、風、波の影響を受けないように西海地区の島影で停泊し、翌日、三重漁港に戻る航路でした。その間、普段経験しないであろう大型船の舵をとる操船訓練、ロープワーク、プランクトン採取などの海洋実習、船舶の構造などの座学など、盛りだくさんの内容で構成され、長崎ならではの特色ある授業科目でした。「乗船の手引き」で、学生は乗船中、禁酒となっており、本センターでもそれを準拠していましたが、最終日、船長に確認したところ、「学部学生に未成年者がいるのでそのような記述になっているが、放送大学学生の年齢構成を考えれば飲酒は問題ない」との話を受け、次回は、夕食後、懇親会を開催し、全国から参加する学生の有意義な交流の場にしたいと考えていました。しかし、コロナ禍、船内では密になるということで、翌年度の授業開設が出来なくなりました。

コロナ禍の影響で単位認定試験が自宅受験に変更されましたが、単位認定試験の準備、実施を経験した者が多く退職しており、学習センターでの再実施は、困難かもしれません。

コロナウイルスと共存する社会での学習センターの役割は、変わらざるを得ませんが、学生にとって有意義な学修、学生支援、学生交流の場であり続けることを祈念いたします。

長崎学習センター開設 30 年に

放送大学名誉学生 満岡 剛太郎

1981年に創立、1983年に設置された放送大学が、多良見町に長崎ビデオ学習センターを開設したのは1992年4月です。それから30年、年月の流れの速さを感じ、長崎学習センターで学んだ一人の学生として、感謝と懐旧の思いを新たにいたします。

開設から4年経った1996年4月、私は、のどかな伊木力の蜜柑村の海辺にあった長崎ビデオ学習センターに入学しました。62歳で健康上の理由で内科開業医の仕事を長男に譲り、時間の余裕ができたからです。それから2017年の3月まで、学部の6コース、院の文化科学専攻をゆっくりとサーフィンさせていただき、この学習を生活の一部として83歳までの21年間を過ごしました。面接授業などで東京や千葉など各地の学習センターを訪れる機会、卒論を書くたびに指導教官のゼミに属して、そこでも、すぐれた先生方や学友たちに恵まれ、素晴らしい時間を持つことも出来ました。この間、常勤ではなく非常勤医師として離島勤務など続けていましたが、考えてみると高齢になってこのような学習の機会を与えられたことはとても幸せなことでした。平和な国、社会、家族に感謝します。

私が最初に大学生になったのは昭和27(1952)年で70年前です。当時、大学で習得した知識や技術のうち、基本的な部分を除くと多くが通用なくなっています。技術や知識の革新が驚くほどの速さで進みました。身近な例では、学習センターも名称がビデオ学習センターとあったように、初めの頃はビデオやカセットテープの教材を借りて学んだものでした。当時 windows95 が出回り始めた頃でした。それから30年、教材や学習方法の変化を身をもって体験しました。関連して放送大学に情報科学コースが新設されたのは2013年でした。Digital Divide 世代の私が学んだ最後のコースになりました。

放送大学を離れて5年、89歳、無職独居の私は、今も好奇心旺盛で、なんら社会に寄与することもなく知を求めています。いまやユニバースからマルチバースへ、原子から素粒子へと時空の広がりが知られ、それも近年のことでした。その他の知見の変換も無数です。人類が有史時代に入って数千年、私たち人類は何ほどのことを知っているのでしょうか。そのような無限の中の渺とした点の個。知らないことばかり増え続け無限の知の前に自分の無知を悟り茫然としますが、昔、受講した海部宣男教授の「太陽系の科学」終章の「人間にとって「知る事」は本能であり、属性である」との言葉に救われています。

最後に年齢を問わず国民の教養レベルの維持向上に、社会の安定的な知識層の形成に大きな役割を果たしてきた放送大学に深く感謝し、今後の発展を心から祈ります。

長崎学習センター 30 周年を祝して

放送大学名誉学生 白仁田 聖紀

放送大学の長崎学習センター開設 30 周年に関して寄稿依頼が来たことで何を書こうかと考えている中、サイレンが鳴り今日は長崎原爆記念日ということ思い出しました。

時に、日本を含め世の中コロナ感染者が続出し、ロシアはクライナ侵攻でウクライナの多くの庶民が犠牲になり、正に戦々恐々の時代になってきました。

話は少し変わるが、私は昭和 15 年生まれで戦時中に父が死亡し、一人の弟も母の乳が少なく結局は餓死状態で死亡し、そして私が小学 5 年生の時それまで結核を患っていた母も死亡し、その時思ったのはストレプトマイシンの新薬を買うお金がなく、みじめな死に方をさせたのが忘れられない、これらを鑑みればウクライナの庶民、特に子供たちが死んでいくのを報道関係で知るのは他人事とは思えず、戦争の惨さを痛感します。

プーチン大統領はロシア国民をウクライナ庶民と同様な立場に置かされた場合どう思うか？ロシアにはボランティア活動や国民に対する思いやりなど、国民性はどうなっているのか？また、国連の対応の悪さに腹立つのは私だけでしょうか！

中国に関しても世界の貧乏国に金を貸し、社会インフラ整備、軍事基地、補給基地の整備に力をつぎ込んでいるようだ。新聞等によると 14 各国以上に融資し債務返済できない国、例えばスリランカ国（旧セイロン国）には 99 年間中国が権益を持つなど、他の負債国に関しても不安が懸念される、中国と言う国は昔から、「孔子の思想や論語、儒教、」など立派な思想があるにも関わらず、何故これらが生かされてないだろうかと考えます。

(小生の考え方が甘いかわからないが…。)

それに比べ、我が国は低開発国に対して他の国より教育に特化していると思われれます。例えば「校舎を提供したり、JICA（海外協力隊）等はボランティア活動で現地人の研修等に力を入れるなど」要はハード面ソフト面の活動を知ることは、日本人として誇りに思います。

<私案、幼児教育には日本式の寺小屋方式があると思うがすでに実施中？…。>

国内においても放送大学の学習制度は「年齢、学歴、職業は問わない」正に、これが本質であり国策であると思います。

私事ですが、学習は順風満帆に進んだわけでもないが、何とか全コース取得できたことは先ず気障な言い方だが自分を褒め、そして関係者に感謝いたします。今後は放送大学の制度が多少変わる中でオンライン Web 授業にも参加できれば生涯学習の一つの対象になると考えております。

最後になりますが、長崎学習センターも本部の制度をもっと活用し学生が尚活躍できることを記念します。まずは 30 周年おめでとうございます。

長崎学習センター設立 30 周年と今後の発展

放送大学長崎同窓会会長 高潮 昇

放送大学長崎学習センター開設 30 周年おめでとうございます。

長崎学習センターの歴史を振り返ると、日本経済がバブル崩壊した翌年、平成 4 年（1992 年）に西彼杵郡多良見町（現諫早市）に開設されました。その後、変遷を経て平成 19 年（2007 年）5 月に現在地（長崎大学附属図書館合築棟 3・4 階）に移転しました。この間、長崎県内における高いレベルの生涯学習機関として通信大学の形を整えてきました。

放送大学の特徴として、①他の大学では見られない様々な社会経験を持つ仲間との触れあいや、幅広い年齢層の学生との出会いがあります。そして同じ“学ぶ”という価値観を持った仲間がいます。②放送大学の良さを実感され、卒業し再入学されるリピーターが多く「学習に終わりはない」と言うことを実践されております。③これからの高齢者は、定年後の第 2 ステージのためのスキルアップを放送大学で身につけようとする人も増えています。④IT 技術の導入により、単位認定試験も自宅から受験出来るようになり離島の学生の教育機会も向上しました。

このように、在学生にとって素晴らしい学習環境ではありますが、今、新型コロナウイルスが今年に入っても猛威を振るい、これにより社会が変化し日常生活や経済活動が停滞しています。この混乱はいずれ収束しますが、その際今までの価値観がリセットされ、社会に不可逆的な変化が起こるものと予想されます。それは、政治、経済、文化などあらゆる分野において、既存のシステムの大きな変革が起きることが想定されます。働き方ではリモートワークが常態化しつつあります。学校教育では、通学生であっても Web を利用した遠隔授業の導入が本格化されております。

放送大学では、設立当初からの通信大学であり、遠隔授業という優れた教育システムで先見性を維持してきましたが、世の中の大学の動向からこのアドバンテージも揺るぎ始めています。

このような環境に対応するため放送大学では、教学 Vision2027 基本理念として「ひとりひとりに最適な学びを放送大学から」を発表しました。社会的使命として、(1) 人生 100 年時代における生涯学習を広く多様に支援する。(2) 職能開発・キャリアアップのための多様なリカレント教育機会を提供する。(3) 人々に広く学位取得への道を開放する。(4) 学術研究の推進と教育イノベーションにより高等教育の内容的および方法的進歩に寄与する。

これらの基本理念に則り、私たち学生も学びを進化させていかなければなりません。放送大学の変革に、学生も「新しい学びが、今、始まる！」に挑戦しましょう。

放送大学と私

放送大学長崎同窓会 峰 昭子

— 放送大学長崎学習センター開設 30 周年おめでとうございます —

私は、2004 年放送大学へ入学。今年で 18 年間在籍していることに感慨深い思いです。大学で学ぶことは常に念頭にあったが、希望する学部、学科のある大学を探せないでいた。還暦を前に、それまでに経験のないこと、ボランティア活動等やってみたいと考えていたが、2001 年に民生委員・児童委員の主任児童委員の委嘱を受けた。1999 年「児童虐待防止法」が成立し、児童虐待は大きな社会問題となっていた。児童問題支援活動のなか、児童虐待が、家庭内暴力（DV）と密接な関連性を知り、2002 年「NPO 法人・DV 防止ながさき」の活動へ加わった。活動の中心となるメンバーが持つ豊かな知識と経験に強い衝撃を受け、自分の一般教養、専門知識不足を認識、少しでも近づき活動したいと、長崎学習センターが長崎大学文教キャンパス移転を契機に入学した。目標を持って大学進学喜びは格別だった。

2010 年の卒業時、勧められるままに「長崎同窓会」へ入会し、気軽に役員会へ参加した。その結果、会報誌「琴の海 10 号」の編集、発行を担当することになった。未知なる役目を引き受け、未熟なスキルでパソコンとにらめっこ、試行錯誤を繰り返しながら会報誌を完成させた。このことは、10 余年同窓会活動を続ける力になっていた。活動する中、多くの人の出会いと数えきれない程の経験と学びがあった。活動を継承でき、「長崎同窓会」のパワーアップを実感している。

2014 年 1 学期、長崎学習センターが開設した「客員教授によるゼミ」は画期的だった。放送大学特有の各コースによる多様なテーマが揃い、希望するゼミに 2 つまで参加できるというユニークなシステムに多くのゼミを受講できた。担当される先生方は年 2 回、専門分野を理解し易く構成され、フレンドリーな環境を創られる。前所長による「伊東ゼミ」はコロナ禍、WEB 会議システム ZOOM で実施されることを聴きつけて「新しい学び」と期待を膨らませて参加した。

18 年の間には、放送大学で学び続けることの意義を感じられず退学を視野に休学した時期があった。東條所長（当時）に、所用の折そのことを切り出すと、さりげなく「学び続けることで視野は広がり、思考の深まりに気づく、」等と所長らしい考えを話された。一新し、その後東條ゼミへ参加、卒業研究へと繋がった。研究主題は『ジェンダー』。「男は仕事、女は家事・育児」という性役割分業意識が一般化していた社会に生きた『75 年（当時）の人生を振り返る』。完成論文発表は、学習センター講義室において、同窓会主催「卒業研究発表会」の場を頂いた。家族、友人、恩師等にも読んでもらった。活動グループでは月例会発表となった。論文を再読してみた、参考文献のなか、受講した印刷教材からの引用も多くあり、授業を担当された先生方の、第一線の理論や知識を学修できていたことを再確認できた。卒業研究にもう一度チャレンジしてみたい。

人生 100 年時代、年齢に相応しい自己実現を求めて学び続けたいと思いを新たにしている。

放送大学長崎学習センターは、私にとってかけがえのない居場所となっています。

長崎学習センター開設 30 周年を祝して

学友会会長 田畑 良高

放送大学長崎学習センター開設 30 周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。この機会に「学友会」「一学生」という立場から、私なりに振り返り、箇条書きします。

(1) 学校は開設 30 周年ですが、学友会は平成 9 年 4 月に発足し、25 周年となります。

学校の肝いりで結成され、サークルの中で最も早い立ち上げでした。初代会長は、「この指止まれ」の三宅三郎氏で、在任 1 年でした。私は 48 歳の若輩ながら発足時の理事の一員でした。二代目会長は、「温厚な人柄で引っ張る」タイプの水頭雄七氏で 12 年の長きにわたり引率してこられましたが、健康と高齢により退かれ、平成 22 年 10 月より田畑が務め、現在に至っています。この間、「学生相互の研鑽・親睦・交流」という学友会の目的は、発足当初も今も変更ありません。この 25 年間で、旅行・交流・見学・講演など 119 の事業を行ってきました。紙面の都合で全部の紹介はできませんが、これに参加人数をかけると、実に多くの学生と「研鑽・親睦・交流」を共に行ってきたこととなります。つけ加えると「楽しみながら」です。この活動実績は、他の放送大学と比べても遜色ないといえるでしょう。学友会の役割は、平たく言うと「クラス会」のようなもので、学生生活に「うるおい」を与えるものです。学友会は、これからも「このような活動」「このような役割」を継続してまいります。学友会の目下の悩みは、「コロナ禍による会員の伸び悩み」です。コロナへの警戒心は「人それぞれ」ですが、「平素なら常連」の足が「遠のく」傾向にあり、「会うこと」すらできず、会員獲得に難航している最中です。

(2) 放送大学は、「人材の宝庫」です。その根拠は、①「学びたい」気持ちさえあれば誰でも入学でき、現役世代はもとより、OB・OG も多数在籍し、「多彩な経歴の持ち主」の集合体となっています。②程度は「人それぞれ」ですが、皆さんが「向学心」を持っています。③「向学心」は、「気持ちの若さ」にもつながります。①②③が同時に備わっている＝田畑が放送大学は「人材の宝庫」と評価する「ゆえん」です。この点は、他の教育機関と異なる放送大学の最大の特徴でしょう。今般、長崎学習センターは 30 周年という節目を迎えましたが、「多彩な人材が集まりやすい」しくみは貴重であり、「放送大学よ永遠なれ」と願っています。個人的なことで恐縮ですが、「勉強熱心ではない＝取得は通算 10 単位」の田畑は、再入学を繰り返して、学生在籍期間は 28 年にもなり、我ながら驚いています。ズバリ「田畑の在学目的＝多彩な人材との交流」です。これは「学友会会長 12 年で、未だ継続中」にも通ずるものです。放送大学をこういう形で活用させていただいています。

研修旅行の思い出

俳句クラブ代表 橋 勇

私は俳句サークルの一員なので俳句に関する事を書かなくてはいけないと思うのですが、私は俳句を始めまだ一年とちょっと、とてもそのことを書けるスキルは持っていないので、他のことを書こうと思います。それではどうするかを考え思いついたのが、飯塚に研修旅行へ行行った事を思い出し、その時の思い出をつづってみようと考えました

飯塚に出かけたのは今から7年前の平成27年5月24日で、その日は天気も良く絶好の旅行日和でした。マイクロバスで出かけたのですが、無事に人数も揃い、定刻8時に一路バスは飯塚に向かい動き出したのでした。車に揺られながら喋っていると、いつの間にか車は飯塚の嘉穂劇場に到着し、皆さん笑顔で劇場を眺め、凄いだとか、素晴らしいだとか思い思いにかなり大きな声で話しをしながら建物の中に入って行きました。

嘉穂劇場は、1931年伊藤 隆により建設された木造3階建ての建築物である。収容人数1,200人で柱が1本もなく客席から舞台を障害物なしで見ることが出来る立派な造りである。毎年9月には全国座長大会が開催され、かなりの賑わいだそうである。

ここで飯塚市街歩きガイドの長谷川さんと吉原さんとの待ち合わせがあり、意義ある1日を過ごすことになるのである。劇場の舞台は客席と同じ位の面積があり、舞台装置も近代的なものを使用せず人力で作動させる回り舞台等、建設当時の方法で今も使用しているとのことであった。説明等が終わると、私たちは舞台の下の奈落の底を始めいたるところを見て回り、そうこうしているうちに親しくなったガイドの吉原さんと映画や映画スターの話をした。私には短く感じられたがいつの間にか昼食の時間となっていた。昼食は嘉穂劇場の劇場弁当で、自分ではかなり美味しいと思った。

次は2番目の見学場所である伊藤伝右衛門邸である。伊藤伝右衛門邸は、大正中期から昭和初期にかけて自身の本邸として造営したものである。

少し伊藤伝右衛門のことを語ると、彼が産まれたのは1861年、亡くなったのが1947年である。江戸時代も終焉に向かう幕末の桜田門外の変が起きた年に筑前国穂波群大谷村で産まれた。暮らしは貧しく、日々の食事に木の芽や草の芽を食べ、蚊帳すら質に出す生活の中、幼い伝右衛門は寺子屋に通う事も無かった。母親は7歳の時に死去、父親は持病のため、8歳の時に親類宅へ預けられかなり苦勞もしたみたいである。伝右衛門10歳の時、父親の病が癒え父親の元に帰り呉服屋に丁稚奉公に出るのである。父親は頼母子講で元手を作り、魚の間屋と石炭の露天掘りを始める。25歳になり生活も安定し1888年旧士族の娘ハルと結婚した。その後事業を拡大し1901年嘉穂銀行取締役役に就任、1903年衆議院議員に出馬して当選した。1910年妻ハルが死去、翌1911年柳原義光伯爵の妹 柳原あき子と再婚、1921年あき子と離婚。これが世にいう白蓮事件である。伊藤伝右衛門は波乱万丈の生き方をしているのでエピソードが沢山あり説明しきれないし紙面もなくなったので研修旅行の思い出はこの辺で終わりたいと思います。

いつまでも青春・第二の人生

旅行研究会代表 溝口 健治

老いてからの時の立つのは早いもの、私が放送大学長崎学習センター（以下 長崎 SC）に縁あって入学して13年目になる。当時、普通のサラリーマン生活をリタイアし、少しのゆとり生活、おまけ人生をどう過ごすか…と一人で思い悩んでいたが、当然何をしたいのか相談する相手もなく日々漠然と過ごしていた。気力・知力・体力は若い時とは比べ物にならぬほど落ちていたが、それでも少しだけの余力があった。

ある時公共の施設で、放送大学のカタログを目にする。大学名は知ってはいたが、はて何の大学？と心許ない。ただ生涯学習の文字が目焼き付いた。「これだ」…後はとんとん拍子に入試のない放送大学に入学することができた。そして卒業まで何とか頑張ってみようという甘い期待があったのが運の尽き、入学後最初の期末試験に戸惑った。過去問など手に入れる術を知らなくて、試験結果はB判定、可もなく不可もなく初めての試験はこんなものだな、独りで納得するが自信満々の甘い考えが打ち砕かれた瞬間でもあった。

それから負けたくない性分に火が着き、入学最初の2年間は週4日5日の割合で長崎 SC へ足を運んで、その間に学友も出来（そう思っている）、同世代の人たちとの語り取り留めのない雑談をワイワイがやがやと、時には学食での楽しいひと時を過ごし、これが第二の青春かと一人思い込んだ。

楽しい学生生活も長くは続かない。学習との闘いもある。同年代の学友たちは、人生経験豊かな一家言持っている猛者ばかりである。やがて放送大学の学生生活は孤独との闘いである…そう思えるようになり、3年・4年と時が過ぎると、孤独さが身に沁み逃げ出したい気も起き学生生活が単調に思えるようになってきた。

そんな時、ふとしたきっかけでサークルの代表にされてしまった。サークル歴2年目の事で、先輩方の巧みな誉め言葉に何の迷いもなく「いいですよ」と二つ返事、今に思えばいとも簡単に話に乗ってしまった。このサークルの代表に収まったことがこれまた孤独との闘いの始まりである。サークルの会議や活動にほとんど変わらぬ会員諸氏、その一家言に時には同調し、時には聞き流して代表の座に居座り続けること10年、気持ちはもう退任したいところではあるが、何せ代表のなり手がいない。溜息付き付き現在に至る。

少し脱線したが、代表10年で得ることが多々あった。昭和の人間に苦手なパソコンとの出会い、少しはパソコンを楽しめるようになった。これは学生生活での収穫となり、これからのおまけ人生に活用したいと思っている。また一番の収穫はサークル活動を通じて多くの人たち学友に出会うことができた事、息抜きのゆとりの場として、老体に鞭打ってまちあるきを楽しんでいる。ここ二年半はコロナ禍の感染予防のため、サークル活動は休止を余儀なくされているが、令和4年4月と6月に二年ぶりにまちあるきを開催して、多数の参加者に賛同を得たが、第7波の急拡大の影響で再活動できるかは微妙なところです。早く元のように会って老いた者同士、雑談の話の花を咲かせようかと思うこの頃である。

長崎学習センターでのサークル活動

パソコンサークル代表 香月 やゑ子

私は1回目の卒業をするまで学習センターに行くのは面接授業と試験日だけでした。親しい友人も出来ず、思い出してみても面接授業のクラスや試験帰りの電車のなかで雑談する程度だったように思います。そんな学生生活だったのですが卒業後も放送大学と関わっていたいなと思って同窓会総会に出席しました。それが大きな間違いで、入会者は私以外にはいなくて出席者はほぼ役員さんだけだったようでした。とんでもない所に入ってしまったと後悔しました。

その頃第1回の文化祭があり、その準備の中で学習センターに行くことも増え、言葉を交わす学友も多くなりました。

親の世話をしなければと思って早期退職して待機していたつもりだったのですが、「なにも出来ない独居老人」と言いながら父は健康に過ごしていましたので、私は放送大学も続けサークル活動にも参加できる自由な時間がありました。

同窓会で立ち上げたパソコンサークルでしたので自動的に参加することになり10年が過ぎました。講師の先生方にも恵まれ、同じことを何度聞いても嫌な顔もされず教えて頂き、適切なアドバイスをもらいます。現在も変わらずお願いしています。

少しずつの進歩ですが、いろんな事を学んでいます。ホームページも作りました。趣味の作品を発表する機会がなくて、それをホームページにアップして遠方の友人にも見て貰いました。ブログも細々と続けています。サークル会員だったKさんは体調を崩し自宅療養中もブログ更新は毎日続けられました。私もそれを励みにしたいと思っています。LINE スタンプ、アニメーションスタンプの作品を作って子供達に買ってもらったこともあります。コロナ禍では若者と同じようにZOOM 講義を体験しました。

大きな間違いだと思った同窓会入会から自然な流れのサークル活動は、今では私の生涯学習になっています。老いを受け入れながら大学の勉学と合わせて続けたいと思っています。

放送大学 継続入学関係者 御中

前略 今回も継続手続き書類を御送り頂き有難度ございました。最近の小生の体調を考え、静かに去る事としました。実に29回目(29年)の長崎ビデオセンター第1期目の生残りです。もう本当に多くの内容を学ばせていただいたと思います。

同封の古いメモ(注:下記の「放送大学に学ぶ」)を御読みになると、小生のいくばくかの状況を御認識頂けるのではと認識しております。

もう体調悪く、書く事が不可能です。放送大学の更なる御活躍を祈るのみです。福岡・佐賀・熊本での学習センターでの面接授業でも40回を超えるのではと認識しています。

有難度ございました。

了

武田 秀雄

放送大学に学ぶ

元学生 武田 秀雄

平成4年7月所用で長崎大学に出掛けた際、学内掲示板を見ていると長崎に放送大学長崎ビデオセンターが開設され、学生を広く募集している事が示されていた。放送大学は既に7~8年前に発足されていることは認識していたが、関東・関西周辺地区に止まっており、長崎で受講出来るとは予想もしていなかった。当時大学卒業後30数年勤務していた企業での定年が迫っており、この機会を活用して、自らの専門分野とは異なる世界を垣間見たいとの予てよりの希望を実行したいと思った。猛烈社員とは言わない迄も、多年に渉る長時間勤務の生活では、必要な専門書を繙くことがやっとの状況でもあった。

幸いにして、長崎ビデオセンター(現在は長崎学習センター)に選科生として入学し、楽しみの世界を繙くことになった。一方この時期には、SOHO(Small Office & Home Office)を設立し、海外企業を中心とした技術コンサル業務を始める時期でもあった。

本業の新たな掲げ上げに忙殺されながら、現在の諫早市多良見町大草にあるビデオセンターに出掛け、幾許かの講座を視聴した。最初の受講項目のひとつに「技術史」があるが、結構分厚いテキストで、内容的に濃密で、教えられることも多く、今後の学習への期待を増幅させるものであった。しかし、本業の業務が急速に拡大し、年間13回にも及ぶ海外業務に出掛ける始末で、折角在籍したものの、1年間全く受講せずの年月が続いた。

しかし、コンサル業務には起伏があり、ぽっかり業務に穴が空く時期があり、この時期を活用して、弁当持参で終日視聴を続けた。疲れた時には、ビデオセンター前の海岸から、長崎空港での航空機の発着状況を見るときは無しに眺め、リラックスした一時を過ごす体験をさせて頂いた。以前厳しい業務体験を継続してきた企業人にとっては、このような機会は真に以て有難い趣でもあった。

多くの学生仲間が全科生切替えの時期から、卒業を意図されて学業に励んでおられたが、私は入学当初の意図通りに、毎年継続して入学を繰返し、万年選科生として今日に至っている。放送大学が自己にとって、どのような意味合いと意義付けがあるのか、思考してみたことがある。実に以て不遜な認識で恐縮であるが、

受講科目の視聴や面接授業への参加は、まさしく、“ほっ”とする時間であり、楽しみを享受する一時でもあった。従って、受講科目には楽しみの世界を繙く科目を選択して今日に至っている。

しかしこのような歩みでも、時の経過は恐ろしいもので、学士入学すれば、2回以上卒業するまでの単位を頂く結果になっている。勿論途中で講義内容に失望して受講を中止した科目や面接授業も数知れずである。それでは放送大学の講義科目が全く自己の参考にならなかったかと言えば、そうではない。僅かではあるが、受講後多くの関連書籍を繙く機会になったこともある。

技術コンサル業務での多くの顧客の依頼項目は企業の生産性向上であり、競争力強化の実践である。これらを遂行するためには数多くの戦略手法を駆使して、早期に目標を達成する必要がある。企業は必要に迫られて、我々のような技術コンサルタントの支援を求めている訳で、極めて濃度の高い改革・改善の遂行が求められる。これらに参考になる講義項目が「産業と技術」（現在は社会と産業）の科目の中に幾許か存在していた。放送大学は教養学部である以上、講義内容にも限界があり、これらの講義をベースに自学自習により一定レベルの知的知識を得ることが可能でもある。例えば創造性強化に関連する情報である。これらの受講を下敷きにして、多くの書籍を読破した。少なくとも100冊以上の書籍を読破し、その理解度を確認する意味で、小冊子に纏めた。（長崎県立図書館や東京・京都・大阪の古書店街で関連書籍を求めた）

長い間在籍させて頂いたお陰で、ユニクな学生各位を知る機会にも恵まれていた。放送大学、大学院（修士課程）を終了し、長崎大学工学部の博士課程に入学、見事に81歳で学位を取得され放送大学在籍者のみならず世間一般にも強い印象を与えた方（私にとっては以前同じ企業で勤務されていた方でもある）がおられたり、多忙な医師業務の傍ら、全く分野の違う部門で修士課程を終了されたり、学部卒業論文が秀逸で修士論文以上の評価を受け、素晴らしい書籍を出版された女性の方等何れも長崎出身の方であり、これらの各位の放送大学活用の仕方や研鑽の有様は私にも種々考えさせられる機会を与えられたものである。純粋数学の分野で、62歳で学士入学され、指導教官を超える画期的な発見を為し遂げられ、70歳で理学博士の学位取得された方の例も最近の話題の一つでもある。生涯学習と言う範疇には納まりきれない優れた歩みには驚きと脱帽を禁じ得ないが、せめてその足元位は頑張りたいとの思いはある。

最近では流石に魅力ある受講科目は十分に視聴し終えたとの思いもあり、面接授業を中心に参画させて頂いているが、次への行動の要としての語学学習に時間を割いている。英語と共にスペイン語の学習の為、毎日多くのテキストを消化するには骨の折れる状況になってきている。確実に記憶力の減退を自認させられている今日この頃である。

先日熊本学習センターでの面接授業でも、80歳の方が頑張ってお受講されており、私自身ももう少し放送大学にもお世話になろうとの思いを強くしたものである。

（長崎学習センター注釈）

武田秀雄さんは長崎ビデオセンターが多良見町（現 諫早市）に開設された年から選科履修生として2021年まで連続して在籍された方です。2021年に継続入学案内へのお礼のお手紙が上記のとおり、大学本部に届きました。このたび、武田さんに本記念誌への転載をお願いしましたところ、ご快諾いただきましたので、一部を除き、原文のまま掲載させていただいております。

写真で見る長崎学習センター

長崎学習センター開設 30 周年記念事業

●記念式典 (2022 年 5 月 18 日)



主催者挨拶 (山下敬彦所長)



祝辞を頂いたご来賓の方々と所長

●記念講演会 (2022 年 5 月 18 日)



講演 1 (放送大学長 岩永雅也 氏)



講演 2 (佐世保市総合医療センター
理事長・院長 増崎英明 氏)

●記念公開講座 (2022 年 7 月 31 日)



(客員教授 堀内伊吹 氏)

●記念公開講座 (2022 年 8 月 27 日)



(客員教授 山下樹三裕 氏)

●記念文化祭 (2022年10月30日)

放送大学長崎学習センター
第3回 文化祭

『放送大学長崎学習センター開設30周年を迎えて』
放送大学長崎学習センターの開設30周年を記念して、学生有志により実行委員会を組織し、下記のとおり文化祭を開催することとなりました。学生の皆さんや一般の皆さんのご来場を心よりお待ちしております。

日時 2022年10月30日(日) 10:00~16:00
場所 放送大学長崎学習センター4階
(長崎市文教町1-14 長崎大学文教キャンパス内)

Program

- 会場 講義室2
- ※会場での対面とZoom(オンライン)を併用したハイブリッド形式で開催します。遠方の方や出席が困難な方はリモートで参加してください。リモート参加のお申込みは次のURL【<https://forms.gle/ChkPoiH1b50rTWs9>】または下のQRコードよりご連絡ください。
- 挨拶 10:00~10:10 第3回文化祭実行委員会
- 健康体操 10:10~10:40 健康体操
- 講演 10:40~12:00 長崎外国語大学長 姫野順一氏
- 落語 13:00~14:00 長崎大学落語研究会
- ~14:00~15:00 新しい字びが 今、始まる!

展示

- 会場 実習室・講義室1
- 時間 10:00~16:00
- ・ちりめん本コレクション (放送大学附属図書館)
- ・幕末・明治期日本古写真コレクション (長崎大学附属図書館)
- ・同窓会・各サークル 活動紹介
- ・在学生作品展

書籍バザー

- 会場 4階特設コーナー
- 時間 10:00~16:00
- ・放送大学の教科書 (履修済み学生から提供された印刷教材) の無料譲渡

●公開講演について

日時 10月30日(日) 10:40~12:00
場所 長崎学習センター4階 (講義室2)
テーマ 写真で振り返る港町長崎の歴史
〜幕末・明治・大正・昭和〜
講師 長崎外国語大学長 姫野 順一 氏

幕末の長崎：蒲山子の丘から大浦外国人居留地と出島を望む
(撮影者不詳 文久2(1862)年ごろ)

長崎大学附属図書館

主催 第3回文化祭実行委員会 後援 放送大学長崎学習センター ☎096-618-1317



(長崎 SC 玄関前)



(講演「写真で振り返る港町長崎の歴史」)



(幕末・明治期の古写真展「長崎の港」)



(サークル展示)



(学生作品 日展入選作品「画室」と長崎 SC の沿革 (職員制作))



(パネルディスカッション)

卒業証書・学位記授与式／入学者の集い（新入生オリエンテーション）

●卒業証書・学位記授与式



●放送大学学位記授与式（東京）



●入学者の集い（所長挨拶）



●入学者の集い（新入生オリエンテーション）



(履修方法等説明)



(Web 単位認定試験等体験)

面接授業

●面接授業 - 潜伏キリシタン関連遺産の考察



●面接授業 - 水環境と人間生活の科学



●面接授業 - 五島灘洋上実習



客員教員によるゼミ

●オンラインゼミ



(コロナ禍第一波の中 (2020.5) での
オンラインゼミ接続確認テスト)

●ゼミ風景 (オンライン併用)



公開講座・講演会

●公開講座(長崎県立図書館)



ミライオン図書館前館記念
県立長崎図書館・放送大学長崎学習センター連携

放送大学 公開講座

11/24日
13:30~15:30
会場: ミライオン図書館 多目的ホール
講師: 伊東 昌子

知っておきたい 骨粗鬆症の知識

入場無料

令和元年 11/24日 13:30~15:30
会場: ミライオン図書館 多目的ホール [大村市東本町 481]
講師: 放送大学長崎学習センター 所長 伊東 昌子氏 (放送大学理学部・専門学系情報学、現代学際・デジタルコンテンツ・インフォマティクス)

同時開催
出張オープンキャンパス
11:00~16:00(予定)

【お問い合わせ】 放送大学長崎学習センター 長崎市文政町1-14 TEL:095-813-1317 FAX:095-813-1325

●コロナ禍でのリレー公開講座(長崎歴史文化博物館ホール)



放送大学 公開講座

参加無料

7/10 土 10:00~12:00
講師: 堀内 伊吹 氏 (長崎学習センター客員教授)
定員: 50名
会場: 長崎大学教育学部 長崎創業室

8/21 日 14:00~16:00
講師: 花田 穂子 氏 (長崎大学客員教授)
テーマ: 「自己肯定感の育つ環境を 考えてみましょう」

8/28 日 14:00~16:00
講師: 永谷 絹一 氏 (長崎大学客員教授)
テーマ: 「できごとノート実践講座」

9/4 日 14:00~16:00
講師: 伊東 昌子 氏 (放送大学客員教授)
テーマ: 「あなたにもできる健康の発見」

9/11 土 14:00~16:00
講師: 上野 義史 氏 (放送大学ICTセンター客員教授)
定員: 80名
会場: オンライン

【お問い合わせ】 放送大学長崎学習センター 長崎市文政町1-14 TEL:095-813-1317 FAX:095-813-1325

放送大学 長崎学習センター

心理学を学びたい方向け 公開講演会

平成31年 2月17日(日)
時間: 13:30~16:00
場所: 長崎学習センター講義室
講師: 森 津 太子

テーマ: 『心理学の可能性 ~認知バイアスの功罪を考える~』

講演会終了後、認定心理士等説明会を開催します

★認定心理士の資格取得等についての説明、また、これから放送大学で心理学を学びたい方に向けて、説明会を開催します。

★希望する方には、終了後個別相談会を実施します。

【定員】 60名 (要予約)
【申込方法】 準備の都合がありますので、参加希望の方は下記まで電話またはFAXでお申込みください。

放送大学長崎学習センター
長崎市文政町1-14 長崎大学文庫キャンパス内
TEL:095-813-1317
FAX:095-813-1325

広報関係 (出張オープンキャンパス)



(商業施設内書店)



(フェスティバル会場)

学生研修旅行



その他の行事

● AED 操作研修



● 公認心理師受験勉強会



サークル活動



(学友会)



(パソコンサークル)

資料一覽

頁

1	入学者の推移	45
	学生種別入学者数（平成4年度第2学期～令和4年度第2学期）	
2	在学生数の推移	46
	(1) 学生種別学生数（平成4年度第2学期～令和4年度第2学期）	46
	(2) 職種別学生数	48
	(2)-1 学部（平成4年10月～令和4年10月）	
	(2)-2 大学院（平成14年4月～令和4年10月）	
	(3) 年代別学生数	51
	(3)-1 学部（平成4年10月～令和4年10月）	
	(3)-2 大学院（平成14年4月～令和4年10月）	
	(4) 自治体別学生数	53
	(4)-1 学部（平成23年度第1学期～令和4年度第2学期）	
	(4)-2 大学院（平成23年度第1学期～令和4年度第2学期）	
	(4)-3 県内自治体別学生数の地図分布（学部・大学院 令和4年度第1学期）	55
3	卒業生・修了生数	56
	学部生・大学院生（平成10年度第1学期～令和4年度第1学期）	
4	面接授業	58
	平成24年度第1学期～令和4年度第1学期	
5	公開講座（公開講演会）	68
	平成23年度第1学期～令和4年度第1学期）	
6	学生研修旅行	71
	平成23年度～令和4年度	
7	施設概要	72
	建物の位置、面積、平面図	
8	歴任教職員スタッフ	73
	歴代所長	
	歴代客員教授等	
	歴代職員	

1 入学者数の推移

学生種別入学者数(平成4年度第2学期～令和4年度第2学期)

(単位：人)

年・学期	学 部					大 学 院					合 計
	全科履修生	選科履修生	科目履修生	特別聴講生	小 計	博士全科生	修士全科生	修士選科生	修士科目生	小 計	
平成 4.2	—	83	308	0	391	—	—	—	—	—	391
5.1	—	122	187	0	309	—	—	—	—	—	309
5.2	—	71	150	0	221	—	—	—	—	—	221
6.1	—	118	112	0	230	—	—	—	—	—	230
6.2	—	66	108	2	176	—	—	—	—	—	176
7.1	—	158	121	0	279	—	—	—	—	—	279
7.2	—	80	106	3	189	—	—	—	—	—	189
8.1	—	178	104	0	282	—	—	—	—	—	282
8.2	—	88	112	5	205	—	—	—	—	—	205
9.1	—	217	123	2	342	—	—	—	—	—	342
9.2	—	118	140	0	258	—	—	—	—	—	258
10.1	—	240	198	1	439	—	—	—	—	—	439
10.2	77	83	104	4	268	—	—	—	—	—	268
11.1	132	214	147	1	494	—	—	—	—	—	494
11.2	68	83	120	7	278	—	—	—	—	—	278
12.1	91	195	125	0	411	—	—	—	—	—	411
12.2	43	59	114	4	220	—	—	—	—	—	220
13.1	90	188	124	0	402	—	—	—	—	—	402
13.2	36	57	115	1	209	—	—	—	—	—	209
14.1	64	172	116	2	354	—	3	—	69	72	426
14.2	34	56	137	2	229	—	—	—	67	67	296
15.1	58	98	109	2	267	—	4	—	76	80	347
15.2	73	75	120	0	268	—	—	—	85	85	353
16.1	79	114	93	0	286	—	4	—	59	63	349
16.2	58	69	109	7	243	—	—	—	58	58	301
17.1	91	137	100	7	335	—	3	41	16	60	395
17.2	34	62	121	9	226	—	—	4	12	16	242
18.1	82	112	82	15	291	—	2	32	14	48	339
18.2	42	86	95	94	317	—	—	4	9	13	330
19.1	77	103	68	22	270	—	3	32	8	43	313
19.2	51	101	102	77	331	—	—	8	5	13	344
20.1	78	88	79	6	251	—	3	27	2	32	283
20.2	57	94	102	59	312	—	—	9	2	11	323
21.1	73	70	55	25	223	—	4	22	1	27	250
21.2	51	89	84	59	283	—	—	12	6	18	301
22.1	83	72	75	23	253	—	4	25	7	36	289
22.2	43	52	78	60	233	—	—	11	8	19	252
23.1	68	69	81	18	236	—	1	22	3	26	262
23.2	49	39	101	53	242	—	—	9	7	16	258
24.1	78	86	76	53	293	—	5	23	4	32	325
24.2	42	49	79	21	191	—	—	11	6	17	208
25.1	85	86	69	20	260	—	5	20	1	26	286
25.2	43	49	82	24	198	—	—	8	1	9	207
26.1	64	70	64	22	220	—	1	14	5	20	240
26.2	29	49	110	18	206	0	—	7	2	9	215

(単位：人)

年・学期	学 部					大 学 院					合 計
	全科履修生	選科履修生	科目履修生	特別聴講生	小 計	博士全科生	修士全科生	修士選科生	修士科目生	小 計	
27.1	70	92	98	8	268	0	3	14	1	18	286
27.2	32	52	120	19	223	—	—	8	5	13	236
28.1	77	82	94	14	267	0	3	20	4	27	294
28.2	42	47	98	14	201	—	—	4	3	7	208
29.1	58	94	57	10	219	0	3	24	3	30	249
29.2	36	77	87	29	229	—	—	7	2	9	238
30.1	78	100	55	4	237	0	2	16	4	22	259
30.2	38	65	85	23	211	—	—	7	4	11	222
令和元.1	60	89	61	13	223	0	6	16	5	27	250
元.2	56	58	55	53	222	—	—	8	4	12	234
2.1	57	82	38	7	184	0	0	17	3	20	204
2.2	54	43	90	39	226	—	—	7	1	8	234
3.1	77	63	44	83	267	0	2	16	3	21	288
3.2	49	50	57	45	201	—	—	7	3	10	211
4.1	68	55	40	39	202	0	3	12	5	20	222
4.2	43	39	53	42	177	—	—	10	7	17	194

2 在学生数の推移

(1) 学生種別学生数 (平成4年度第2学期～令和4年度第2学期)

(単位：人)

学 期	学 部					大 学 院					合 計
	全科履修生	選科履修生	科目履修生	特別聴講生	小 計	博士全科生	修士全科生	修士選科生	修士科目生	小 計	
平成 4.2	—	83	308	0	391	—	—	—	—	—	391
5.1	—	204	187	0	391	—	—	—	—	—	391
5.2	—	193	150	0	343	—	—	—	—	—	343
6.1	—	188	112	0	300	—	—	—	—	—	300
6.2	—	184	108	2	294	—	—	—	—	—	294
7.1	—	226	121	0	347	—	—	—	—	—	347
7.2	—	239	106	3	348	—	—	—	—	—	348
8.1	—	258	104	0	362	—	—	—	—	—	362
8.2	—	263	112	5	380	—	—	—	—	—	380
9.1	—	304	123	2	429	—	—	—	—	—	429
9.2	—	332	140	0	472	—	—	—	—	—	472
10.1	—	354	198	1	553	—	—	—	—	—	553
10.2	93	317	104	4	518	—	—	—	—	—	518
11.1	217	297	147	1	662	—	—	—	—	—	662
11.2	280	295	120	7	702	—	—	—	—	—	702
12.1	365	276	125	0	766	—	—	—	—	—	766
12.2	398	250	114	4	766	—	—	—	—	—	766
13.1	465	247	124	0	836	—	—	—	—	—	836
13.2	477	243	115	1	836	—	—	—	—	—	836
14.1	499	230	116	2	847	—	3	—	69	72	919
14.2	487	227	137	2	853	—	3	—	67	70	923

(単位：人)

学 期	学 部					大 学 院					合 計
	全科履修生	選科履修生	科目履修生	特別聴講生	小 計	博士全科生	修士全科生	修士選科生	修士科目生	小 計	
15.1	493	154	109	2	758	—	7	—	76	83	841
15.2	522	172	120	0	814	—	7	—	85	92	906
16.1	550	188	93	0	831	—	9	—	59	68	899
16.2	582	184	109	7	882	—	9	—	58	67	949
17.1	623	203	100	7	933	—	7	41	16	64	997
17.2	607	201	121	9	938	—	8	45	12	65	1003
18.1	614	173	82	15	884	—	7	36	14	57	941
18.2	586	199	95	94	974	—	7	36	9	52	1026
19.1	607	190	68	22	887	—	9	37	8	54	941
19.2	609	202	102	77	990	—	9	40	5	54	1044
20.1	621	188	79	6	894	—	7	35	2	44	938
20.2	603	182	102	59	946	—	7	36	2	45	991
21.1	598	164	55	25	842	—	8	31	1	40	882
21.2	588	158	84	59	889	—	8	34	6	48	937
22.1	591	163	75	23	852	—	9	36	7	52	904
22.2	577	125	78	60	840	—	8	36	8	52	892
23.1	578	122	81	18	799	—	5	33	3	41	840
23.2	585	113	101	53	852	—	5	33	7	45	897
24.1	592	127	76	53	848	—	7	34	4	45	893
24.2	588	136	79	21	824	—	7	34	6	47	871
25.1	598	140	69	20	827	—	11	31	1	43	870
25.2	601	135	82	24	842	—	11	30	1	42	884
26.1	602	119	64	22	807	—	11	24	5	40	847
26.2	599	120	110	18	847	0	10	21	2	33	880
27.1	597	140	98	8	843	0	6	21	1	28	871
27.2	570	144	120	19	853	0	6	23	5	34	887
28.1	586	139	94	14	833	0	7	29	4	40	873
28.2	572	130	98	14	814	0	7	23	3	33	847
29.1	559	141	57	10	767	0	8	29	3	40	807
29.2	547	171	87	29	834	0	7	32	2	41	875
30.1	555	177	55	4	791	0	7	23	4	34	825
30.2	526	167	85	23	801	0	7	23	4	34	835
令和元.1	530	155	61	13	759	0	12	23	5	40	799
元.2	523	148	55	53	779	1	12	24	4	41	820
2.1	514	140	38	7	699	1	9	26	3	39	738
2.2	505	128	90	39	762	1	9	24	1	35	797
3.1	512	107	44	83	746	1	6	23	3	33	779
3.2	500	113	57	45	715	0	6	23	3	32	747
4.1	514	107	40	39	700	0	7	20	5	32	732
4.2	496	97	53	42	688	0	7	22	7	36	724

(2) 職種別学生数

(2)-1 学部 (平成4年10月～令和4年10月)

(単位：人)

年・月 職種	平成4年		5年		6年		7年		8年		9年		10年	
	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	
教 員	12	20	21	15	9	9	14	22	34	32	43	34	34	
会社員等	83	90	64	63	80	131	112	111	111	105	109	129	111	
公務員等	200	143	148	115	103	98	104	82	87	80	84	127	103	
自営・自由業	15	25	20	15	16	19	18	22	20	16	18	17	19	
農水業等	2	4	4	4	6	5	3	5	3	3	3	4	2	
他大学等学生														
看護師等														
アルバイト等														
無 職	49	73	47	53	50	53	52	57	68	81	101	104	96	
その他	30	36	39	35	30	32	45	63	57	112	114	138	153	
合 計	391	391	343	300	294	347	348	362	380	429	472	553	518	

年・月 職種	11年		12年		13年		14年		15年		16年		17年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
教 員	36	68	45	49	50	52	45	59	53	63	43	58	48	61
会社員等	146	147	179	175	189	189	202	192	165	181	168	153	142	122
公務員等	160	128	165	154	197	188	176	175	157	166	125	153	140	136
自営・自由業	22	27	31	35	36	33	37	35	34	38	35	32	30	27
農水業等	3	3	3	4	4	4	6	7	4	4	5	6	6	7
他大学等学生			51	53	40	46	50	51	9	6	9	16	14	15
看護師等											66	114	218	238
アルバイト等							41	51	59	57	51	56	64	61
無 職	125	126	142	142	150	157	152	151	155	157	171	179	178	187
その他	170	203	150	154	170	167	138	132	122	142	158	115	93	84
合 計	662	702	766	766	836	836	847	853	758	814	831	882	933	938

年・月 職種	18年		19年		20年		21年		22年		23年		24年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
教 員	49	56	50	78	60	65	52	52	49	55	44	56	48	51
会社員等	113	100	100	98	104	101	84	88	96	96	99	100	102	102
公務員等	108	105	96	101	84	83	74	86	79	67	71	82	71	70
自営・自由業	24	25	24	31	32	31	30	24	23	29	32	31	36	36
農水業等	8	7	9	9	7	9	8	7	7	7	7	8	4	4
他大学等学生	18	98	24	80	8	61	29	62	28	69	27	62	63	30
看護師等	251	292	304	314	322	308	295	301	283	237	229	217	224	232
アルバイト等	58	56	56	63	54	64	58	60	66	68	65	62	71	70
無 職	191	183	176	162	169	164	154	147	159	163	167	179	180	186
その他	64	52	48	54	54	60	58	62	62	49	58	55	49	43
合 計	884	974	887	990	894	946	842	889	852	840	799	852	848	824

年・月 職種	25年		26年		27年		28年		29年		30年		31年/令和元年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
教員	38	46	40	81	75	85	63	70	54	88	72	76	59	67
会社員等	101	102	94	100	99	106	118	112	101	107	117	107	113	100
公務員等	77	76	77	72	80	82	79	77	72	77	66	73	68	67
自営・自由業	37	42	43	45	48	41	40	43	40	38	36	36	35	30
農水業等	4	4	5	5	3	2	3	2	1	2	1	2	2	2
他大学等学生	32	35	26	23	15	26	22	22	20	41	14	8	10	11
看護師等	230	220	211	202	196	169	170	155	147	154	147	143	146	134
アルバイト等	68	69	63	65	68	75	77	73	70	73	77	78	73	73
無職	200	204	204	210	210	210	212	212	209	206	205	202	190	191
その他	40	44	44	44	49	57	49	48	53	48	56	76	63	104
合計	827	842	807	847	843	853	833	814	767	834	791	801	759	779

年・月 職種	令和2年		令和3年		令和4年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月
教員	52	83	48	58	51	56
会社員等	90	88	107	111	120	117
公務員等	62	79	70	79	77	78
自営・自由業	34	29	33	31	31	31
農水業等	1	3	3	3	3	3
他大学等学生	11	10	10	12	12	12
看護師等	142	127	96	93	83	74
アルバイト等	69	61	57	81	61	67
無職	188	190	187	154	173	50
その他	50	92	135	93	89	200
合計	699	762	746	715	700	688

注：特別聴講学生は、平成30年度以降は「その他」で計上（平成29年以前は「他大学等学生」で計上）

(2)-2 大学院 (平成 14 年 4 月～令和 4 年 10 月)

(単位：人)

年・月 職種	平成 14 年		15 年		16 年		17 年		18 年		19 年		20 年	
	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月
教 員	40	39	44	46	22	24	21	20	15	15	16	15	10	12
会社員等	5	5	5	6	8	6	7	8	10	6	5	4	5	7
公務員等	6	7	7	8	7	5	7	7	4	5	7	7	6	5
自営・自由業	7	4	7	8	6	6	6	4	6	5	6	6	5	3
農水業等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
他大学等学生	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
看護師等				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アルバイト等	0	3	3	2	5	3	2	2	2	1	3	3	3	3
無 職	7	9	11	15	13	18	14	16	15	14	12	12	8	9
その他	7	3	6	7	6	5	6	8	5	6	5	7	7	6
合 計	72	70	83	92	68	67	64	65	57	52	54	54	44	45

年・月 職種	21 年		22 年		23 年		24 年		25 年		26 年		27 年	
	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月
教 員	8	9	6	5	6	7	10	10	9	9	6	4	4	6
会社員等	9	10	12	15	9	6	5	7	6	6	4	3	3	4
公務員等	5	6	6	7	3	4	4	4	3	3	5	3	0	1
自営・自由業	2	4	4	4	3	6	6	5	5	4	4	4	2	3
農水業等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
他大学等学生	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
看護師等	1	2	2	1	1	1	2	2	2	2	4	6	5	4
アルバイト等	2	2	4	4	3	5	4	4	3	2	4	3	3	3
無 職	9	10	10	8	9	10	10	11	10	11	8	7	10	10
その他	4	5	8	8	7	6	4	4	4	4	5	3	1	3
合 計	40	48	52	52	41	45	45	47	43	42	40	33	28	34

年・月 職種	28 年		29 年		30 年		31 年 / 令和元年		令和 2 年		3 年		4 年	
	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月
教 員	9	8	7	7	5	5	6	5	6	8	9	8	6	5
会社員等	6	4	3	4	4	1	3	3	5	5	5	5	2	6
公務員等	2	2	3	4	4	5	4	4	2	2	3	4	4	2
自営・自由業	2	1	6	4	4	4	4	4	1	1	1	1	1	1
農水業等	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
他大学等学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
看護師等	4	3	9	10	4	4	7	6	7	5	4	2	7	9
アルバイト等	3	2	4	4	5	4	5	6	5	3	3	3	3	4
無 職	11	10	5	5	5	8	9	10	11	11	7	7	6	1
その他	3	3	3	3	3	3	2	3	2	0	1	1	2	7
合 計	40	33	40	41	34	34	40	41	39	35	33	32	32	36

(3) 年代別学生数

(3)-1 学部 (平成4年10月~令和4年10月)

(単位：人)

年・月	平成4年		5年		6年		7年		8年		9年		10年	
年代	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
10代	1	2	1	3	1	1	0	3	1	7	1	1	2	
20代	68	63	53	49	54	66	76	96	105	144	146	171	177	
30代	84	86	76	67	63	77	70	61	70	75	94	112	111	
40代	137	129	113	93	94	95	98	95	91	83	93	117	86	
50代	64	70	66	55	52	68	64	61	63	54	62	75	66	
60代~	37	41	34	33	30	40	40	46	50	66	76	77	76	
合計	391	391	343	300	294	347	348	362	380	429	472	553	518	

年・月	11年		12年		13年		14年		15年		16年		17年	
年代	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
10代	3	7	12	6	3	6	4	7	9	12	10	10	7	5
20代	207	234	254	237	264	256	229	229	179	181	168	185	154	159
30代	156	163	165	174	193	198	204	205	183	189	182	207	234	234
40代	111	123	136	144	154	149	161	160	135	163	182	188	208	213
50代	101	95	109	110	117	114	125	124	119	134	150	151	185	186
60代~	84	80	90	95	105	113	124	128	133	135	139	141	145	141
合計	662	702	766	766	836	836	847	853	758	814	831	882	933	938

年・月	18年		19年		20年		21年		22年		23年		24年	
年代	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
10代	10	82	17	76	7	59	25	52	11	45	13	48	32	10
20代	140	145	120	131	99	120	98	115	119	124	109	126	136	123
30代	223	230	230	245	241	242	200	209	203	182	174	163	161	167
40代	190	208	197	222	222	204	208	198	194	158	156	167	171	168
50代	164	166	179	172	177	178	163	158	153	150	145	144	140	143
60代~	157	143	144	144	148	143	148	157	172	181	202	204	208	213
合計	884	974	887	990	894	946	842	889	852	840	799	852	848	824

年・月	25年		26年		27年		28年		29年		30年		31年/令和元年	
年代	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
10代	6	14	10	6	6	9	11	9	10	15	7	9	6	22
20代	110	119	104	110	108	119	111	108	96	133	105	124	102	118
30代	160	159	153	179	180	167	153	151	131	140	135	131	125	123
40代	171	180	161	168	154	164	164	161	144	160	169	158	163	151
50代	149	143	152	151	144	142	146	144	149	157	145	142	125	127
60代~	231	227	227	233	251	252	248	241	237	229	230	237	238	238
合計	827	842	807	847	843	853	833	814	767	834	791	801	759	779

年・月	2年		3年		4年	
年代	4月	10月	4月	10月	4月	10月
10代	3	15	76	21	35	24
20代	75	105	84	113	97	111
30代	122	128	102	110	112	94
40代	144	151	136	130	123	133
50代	124	133	108	115	118	112
60代~	231	231	240	226	215	214
合計	699	763	746	715	700	688

(3)-2 大学院 (平成14年4月~令和4年10月)

(単位:人)

年・月 年代	平成14年		15年		16年		17年		18年		19年		20年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
20代	3	1	2	3	4	1	1	1	4	3	5	4	5	5
30代	23	19	30	23	14	16	14	16	12	8	8	8	5	6
40代	25	24	22	32	17	20	21	18	16	17	18	17	15	14
50代	11	17	18	21	21	18	18	19	15	13	14	15	9	8
60代~	10	9	11	13	12	12	10	11	10	11	9	10	10	12
合計	72	70	83	92	68	67	64	65	57	52	54	54	44	45

年・月 年代	21年		22年		23年		24年		25年		26年		27年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
20代	2	4	8	6	3	3	1	2	4	4	4	4	2	3
30代	5	9	10	10	7	8	7	8	7	7	6	4	2	2
40代	12	12	12	15	11	12	8	8	8	10	8	3	4	6
50代	6	9	10	11	10	11	12	14	11	9	10	11	11	13
60代~	15	14	12	10	10	11	17	15	13	12	12	11	9	10
合計	40	48	52	52	41	45	45	47	43	42	40	33	28	34

年・月 年代	28年		29年		30年		31年/令和元年		2年		3年		4年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
20代	4	3	4	4	2	2	4	4	3	2	2	3	4	3
30代	4	3	8	6	5	6	6	5	4	4	4	3	4	7
40代	8	5	6	10	9	6	8	6	5	4	5	3	2	6
50代	13	10	12	12	10	9	12	13	14	14	12	11	12	9
60代~	11	12	10	9	8	11	10	13	13	11	10	12	10	11
合計	40	33	40	41	34	34	40	41	39	35	33	32	32	36

(4) 自治体別学生数

(4)-1 学部 (平成 23 年度第 1 学期～令和 4 年度第 2 学期)

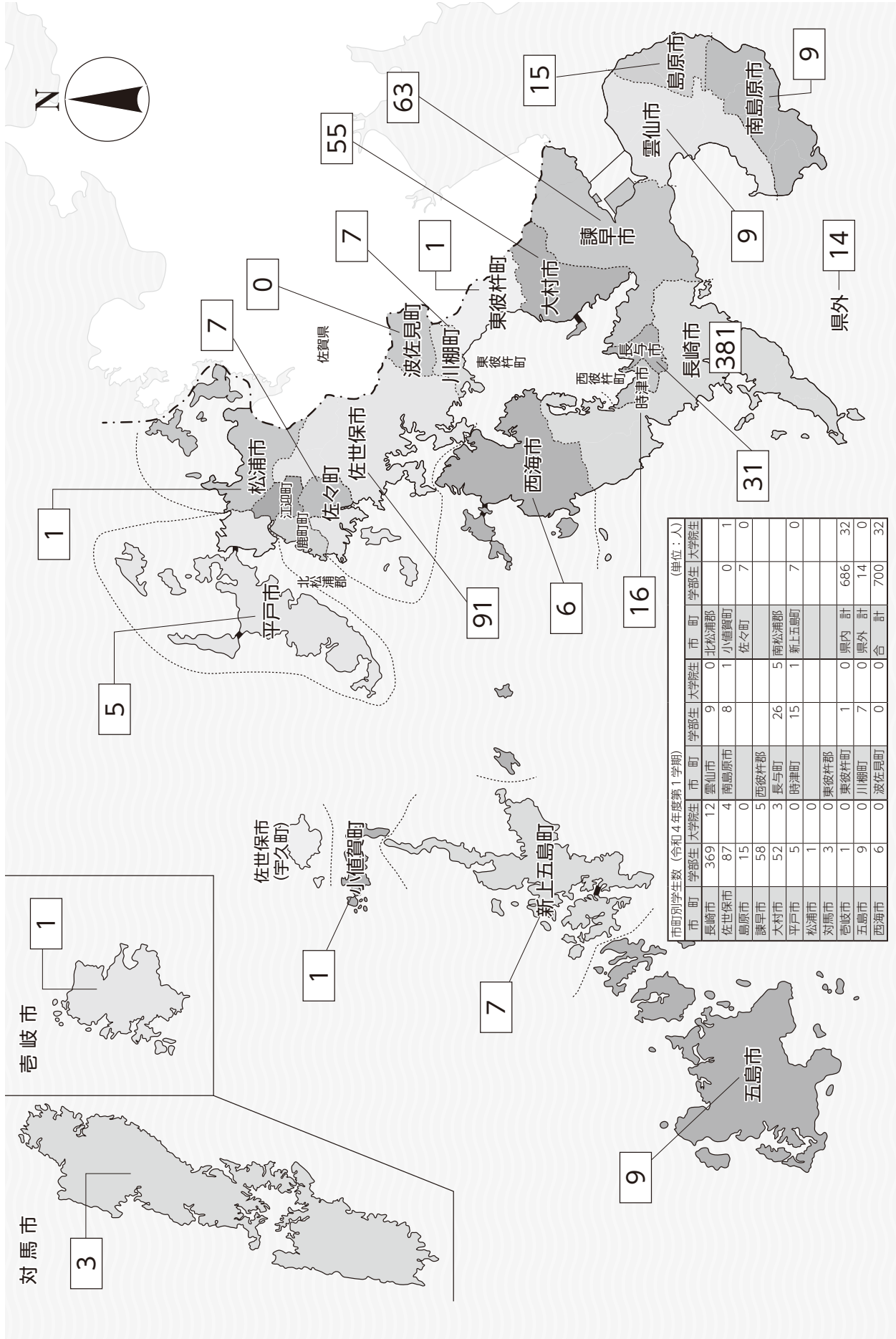
(単位：人)

年・月 市町村名	平成 23 年		平成 24 年		平成 25 年		平成 26 年		平成 27 年		平成 28 年		平成 29 年		平成 30 年		平成 31 年/令和 1 年		令和 2 年		令和 3 年		令和 4 年	
	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月	4 月	10 月
長崎市	390	444	443	409	417	422	401	410	404	409	410	398	383	415	385	391	367	412	351	408	427	381	369	355
佐世保市	87	81	79	84	78	83	78	88	77	83	82	88	83	92	84	84	89	82	70	71	70	83	87	88
島原市	24	24	22	21	23	21	18	23	21	23	21	16	15	24	19	22	23	17	15	19	17	16	15	20
諫早市	81	82	91	94	92	96	89	90	103	90	83	91	80	68	74	81	80	73	75	78	61	59	58	58
大村市	55	57	59	63	63	59	51	59	59	61	61	66	59	64	61	66	57	57	60	60	54	55	52	47
平戸市	2	1	1	1	5	4	4	4	7	7	8	5	4	3	6	6	6	5	4	7	6	7	5	9
松浦市	5	7	3	1	4	4	3	5	5	4	2	2	3	3	3	2	3	2	2	2	1	1	1	1
対馬市	1	1	1	1			1	1	1	2	1			2		1	2	1	1	1		2	3	2
杵岐市	2	2	1	1					2	2	2	2							1			1	1	1
五島市	9	11	9	9	9	11	13	18	17	16	14	17	12	15	15	12	11	10	9	7	8	10	9	9
西海市	9	11	12	10	10	13	16	14	11	12	11	7	7	7	8	11	11	8	6	7	6	6	6	6
雲仙市	17	14	10	9	13	14	15	15	12	13	19	20	18	18	21	20	20	15	14	12	10	9	9	10
南島原市	16	16	13	17	15	13	11	12	15	14	10	7	7	11	11	11	8	10	8	9	10	9	8	6
長与町	40	40	41	43	45	47	44	43	47	46	45	40	43	47	49	40	32	37	37	40	32	32	26	26
時津町	33	33	32	30	25	27	26	27	25	28	25	20	20	21	23	26	21	19	16	15	14	13	15	17
東彼杵町	3	3	4	4	3	3	5	5	2	1	2	2	3	4	3	3	1	2	2	3	2	2	1	1
川棚町	4	4	5	2	2	3	3	3	4	5	4	3	4	5	4	2	3	4	4	4	2	4	7	7
波佐見町	4	5	3	3	3	3	3	3	3	2	1	1	2	1	1	2	3	2		1	1			1
小値賀町																								
佐々町	5	4	5	6	3	2	3	4	5	8	9	10	8	10	7	7	8	9	8	7	8	6	7	6
新上五島町		1	3	4	5	4	8	8	8	10	9	9	8	7	6	5	4	5	5	5	6	6	7	6
県外	12	11	11	12	12	13	15	15	15	17	14	10	8	17	11	9	10	9	11	6	11	13	14	12
合計	799	852	848	824	827	842	807	847	843	853	833	814	767	834	791	801	759	779	699	762	746	715	700	688

(4)-2 大学院 (平成 23 年度第 1 学期～令和 4 年度第 2 学期) (単位：人)

年・月 市町村名	平成 23 年		平成 24 年		平成 25 年		平成 26 年		平成 27 年		平成 28 年		平成 29 年		平成 30 年		平成 31 年(令和元)		令和 2 年		令和 3 年		令和 4 年	
	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月	4月	10月
長崎市	27	27	24	25	22	20	19	17	12	14	15	11	18	18	13	12	19	22	21	19	16	15	12	14
佐世保市	6	8	7	7	8	7	6	3	1	1	2	2	4	5	5	5	3	3	3	3	3	3	4	5
島原市	2	2	2	2	1	1	1	1			1	1					1	1	2	2				
諫早市	2	3	2	2	2	2	2	3	5	5	5	5	7	8	6	6	6	5	4	4	5	3	5	5
大村市	1	1	3	4	3	2	1	2	2	3	3	2	1	2	2	3	5	4	4	3	4	4	3	3
平戸市													1	1					1					
松浦市			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1												
対馬市			1														1							
杵岐市																								
五島市			1	1	1	1									1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
西海市																								
雲仙市					1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
南島原市		1	1	1	1	2	3	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	1					1	1
長与町	1	1	1	2	2	4	3	1	2	3	5	5	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	3	5
時津町						1	2	1	1	2	3	2	2	2	1	1							1	1
東彼杵町																								
川棚町	1	1	1	1																				
波佐見町																								
小値賀町																						1	1	1
佐々町	1						1	1	1	1	1	1												
新上五島町													1	1	1									
県外			1	1	1																			
合計	41	45	45	47	43	42	40	33	28	34	40	33	40	41	34	34	40	41	39	35	33	32	32	36

(4)-3 県内自治体別学生数の地図分布 (学部・大学院 令和4年度第1学期)



3 卒業生・修了生数

(単位：人)

年 度 ・ 学 期		学 部		大 学 院	
		卒業生数	累 計	修了生数	累 計
平成10年度	第1学期	2	2		
	第2学期	1	3	—	—
平成11年度	第1学期	0	3		
	第2学期	3	6	—	—
平成12年度	第1学期	5	11		
	第2学期	14	25	—	—
平成13年度	第1学期	10	35		
	第2学期	21	56	—	—
平成14年度	第1学期	19	75		
	第2学期	26	101	—	—
平成15年度	第1学期	13	114		
	第2学期	19	133	2	2
平成16年度	第1学期	8	141		
	第2学期	27	168	5	7
平成17年度	第1学期	18	186		
	第2学期	24	210	3	10
平成18年度	第1学期	26	236		
	第2学期	27	263	1	11
平成19年度	第1学期	21	284		
	第2学期	27	311	4	15
平成20年度	第1学期	19	330		
	第2学期	26	356	2	17
平成21年度	第1学期	25	381		
	第2学期	31	412	3	20
平成22年度	第1学期	20	432		
	第2学期	32	464	3	23

年 度 ・ 学 期		学 部		大 学 院	
		卒 業 生 数	累 計	修 了 生 数	累 計
平成23年度	第1学期	18	482		
	第2学期	30	512	3	26
平成24年度	第1学期	11	523		
	第2学期	33	556	1	27
平成25年度	第1学期	13	569		
	第2学期	20	589	1	28
平成26年度	第1学期	12	601	1	29
	第2学期	31	632	6	35
平成27年度	第1学期	24	656		
	第2学期	31	687	1	36
平成28年度	第1学期	17	704		
	第2学期	30	734	2	38
平成29年度	第1学期	23	757		
	第2学期	38	795	2	40
平成30年度	第1学期	29	824		
	第2学期	30	854	1	41
令和元年度	第1学期	26	880		
	第2学期	23	903	3	44
令和2年度	第1学期	30	933		
	第2学期	37	970	4	48
令和3年度	第1学期	30	1000		
	第2学期	33	1033	1	49
令和4年度	第1学期	32	1065		

4 面接授業

平成 24 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属 ・ 職 名
初歩からのパソコン	川 合 慧	放送大学教授
日本文化論—宗教民俗学の視点	福 島 邦 夫	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授
ジェンダーと社会	石 川 由香里	活水女子大学健康生活学部准教授
パソコンの基礎知識	藤 村 誠	長崎大学大学院工学研究科准教授
中国語	周 国 強	長崎県立大学国際情報学部准教授
アメリカの歴史と文化を読む	上 野 葉 子	活水女子大学文学部准教授
英語翻訳入門	南 津 佳 広	長崎外国語大学外国語学部講師
健康と運動	熊 谷 賢 哉	長崎国際大学人間社会学部教授
いのちの分子ストレス応答学	鈴 木 啓 司	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科准教授
健康と栄養	田 中 一 成	長崎県立大学看護栄養学部教授
医療ソーシャルワーク	友 池 敏 雄	長崎国際大学人間社会学部准教授
神経心理学	足 立 耕 平	長崎純心大学人文学部講師
心理学実験 1	星 薫	放送大学准教授
身近な題材で学ぶ心理測定法	橋 口 晋	長崎純心大学非常勤講師
子どもの発達と保育	進 野 智 子	長崎大学名誉教授
冷戦期の国際関係史	荻 野 晃	長崎県立大学国際情報学部教授
日米関係と中国・北朝鮮	瀬 端 孝 夫	長崎県立大学国際情報学部教授
情報と法をめぐる近年の状況	實 原 隆 志	長崎県立大学国際情報学部講師
アートと観光	小 坂 智 子	長崎国際大学人間社会学部教授
医療と保健の文化人類学	増 田 研	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授
地球環境のシステム科学	武 藤 鉄 司	長崎大学大学院水産・環境総合科学研究科教授

平成 24 年度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属 ・ 職 名
日本文学と日本らしさ	常 吉 幸 子	活水女子大学文学部教授
文化と社会	吉 光 正 絵	長崎県立大学国際情報学部准教授
栄養の生物学	野 村 秀 一	長崎国際大学健康管理学部教授
初級韓国語	劉 卿 美	長崎大学大学教育機能開発センター准教授
中国語入門	楊 暁 安	長崎大学大学教育機能開発センター教授
英語コミュニケーション	田 中 誠	長崎国際大学人間社会学部准教授
ジョギング・ウォーキング	宮 良 俊 行	長崎国際大学人間社会学部准教授
健康生活に活かす薬学	佐々木 均	長崎大学病院薬剤部教授
食べ物と栄養	上江洲 香代子	活水女子大学健康生活学部准教授
やさしい臨床医学入門	柴 田 哲 雄	長崎国際大学人間社会学部教授
イメージ心理学実習	佐 藤 仁 美	放送大学准教授
ライフサイクルとカウンセリング	大 野 弘 之	長崎純心大学人文学部教授
図表で学ぶ心理テスト	長 尾 博	活水女子大学文学部教授
心理学実験 1	村 田 義 幸	長崎大学名誉教授
女性労働の発展とその社会的背景	園 井 ゆ り	活水女子大学文学部准教授
地場産業論	海老澤 昭 郎	長崎国際大学人間社会学部准教授
江戸時代の長崎奉行と対馬藩	岡 本 健一郎	長崎歴史文化博物館研究員
長崎文化論	野 中 和 孝	活水女子大学文学部教授
映像文化論	尾 場 均	長崎国際大学人間社会学部准教授
生活と環境	吉 田 大 介	活水女子大学健康生活学部教授
水環境 / 生態系の保全と回復	岡 田 光 正	放送大学教授

平成 25 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
初歩からのパソコン	辻 靖 彦	放送大学准教授
日本語の物の見方とその仕組み	渡 辺 誠 治	活水女子大学文学部准教授
日本近現代文学史	服 部 康 喜	活水女子大学文学部教授
中国思想	連 清 吉	長崎大学環境科学部教授
法と社会	渡 邊 弘	活水女子大学文学部准教授
生物の動きを司るタンパク質	市 川 寿	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授
中国語基礎入門	高 山 乾 忠	長崎ウエスレヤン大学教授
リスニング力アップに向けて	川 島 浩 勝	長崎外国語大学外国語学部教授
基礎韓国語	松 岡 雄 太	長崎外国語大学外国語学部准教授
運動制御の心理学	山 内 正 毅	長崎大学教育学部教授
介護の基礎	山 崎 久 子	長崎国際大学人間社会学部教授
クスリの光と影	西 田 孝 洋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
高齢者福祉	井 上 美代子	長崎短期大学保育学科准教授
心理学実験 2	山 地 弘 起	長崎大学大学教育機能開発センター准教授
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎純心大学非常勤講師
発達障害児者への心理的支援	黒 山 竜 太	長崎国際大学人間社会学部准教授
職場におけるリーダーシップ	杉 原 敏 夫	長崎大学名誉教授 長崎学習センター客員教授
長崎経済の現状と課題	山 口 純 哉	長崎大学経済学部准教授
人の移動と「創造」される文化	山 田 千香子	長崎県立大学経済学部教授
古代の天変と歴史	細 井 浩 志	活水女子大学文学部教授
ピアノで楽しむ西洋音楽史入門	堀 内 伊 吹	長崎大学教育学部教授
公害・環境政策と公共性	早 瀬 隆 司	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授

平成 25 年度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
初歩からのパソコン	藤 村 誠	長崎大学大学院工学研究科准教授
アメリカ文化	ブライアン グッツマン	長崎大学非常勤講師
世界の人々と文化	石 井 奈 緒	活水女子大学文学部准教授
日本国憲法	米 倉 幸 生	長崎純心大学人文学部准教授
科学の起源と発展	宮 崎 明 人	長崎県立大学経済学部教授
感覚と行動の生物学	岡 田 二 郎	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授
韓国語入門	梁 正 善	長崎外国語大学外国語学部特任講師
中国語初級 (2013)	宮 本 徹	放送大学准教授
児童文学で読むアメリカ	加 島 巧	長崎外国語大学外国語学部教授
健康と運動の科学	管 原 正 志	長崎大学教育学部教授
子ども家庭福祉	徳 永 幸 子	活水女子大学健康生活学部教授
健康生成論とストレス対処力	戸ヶ里 泰 典	放送大学准教授
ヒトの一生と栄養	小 玉 智 章	長崎国際大学健康管理学部講師
脳の学習機能と発達障害	鈴 木 保 巳	長崎大学教育学部教授
心理学実験 1	村 田 義 幸	長崎大学名誉教授
子ども理解と支援	土 居 隆 子	活水女子大学健康生活学部教授
イノベーションの経営学	西 村 宣 彦	長崎大学経済学部教授
ヨーロッパの政治と経済	成 田 真樹子	長崎大学経済学部准教授
江戸時代の漢詩に詠まれた長崎	中 島 貴 奈	長崎大学教育学部准教授
バイオテクノロジーと幸福の追求	篠 原 駿一郎	長崎大学名誉教授 長崎学習センター客員教授
東アジアにおける長崎の歴史	深 瀬 公一郎	長崎歴史文化博物館主任研究員
オペレーションズリサーチ	杉 原 敏 夫	長崎大学名誉教授 長崎学習センター客員教授
土壌の科学	西 山 雅 也	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授

平成 26 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
世界につながる江戸時代の長崎	木 村 直 樹	長崎大学多文化社会学部准教授
オランダと西欧の文化と歴史	山 下 龍	長崎大学言語教育研究センター助教
日常の法律問題	福 島 一 代	長崎県弁護士会弁護士
核兵器のない世界は可能か	中 村 桂 子	長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授
動物媒介性感染症の流行と環境	高 木 正 洋	長崎大学名誉教授
五島灘洋上実習	兼 原 壽 生	長崎大学水産学部教授
	青 島 隆	長崎大学水産学部准教授
	八 木 光 晴	長崎大学水産学部特任助教
初級韓国語	劉 卿 美	長崎大学言語教育研究センター教授
中国語	周 国 強	長崎県立大学国際情報学部准教授
国際開発と国際保健	青 木 克 己	長崎大学大学院国際健康開発研究科特任教授
よく噛んで元気になろう！	澤 瀬 隆	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	吉 村 篤 利	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科准教授
心理学実験 2	山 地 弘 起	長崎大学大学院教育イノベーションセンター教授
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎純心大学非常勤講師
東アジア諸国の経済発展	高 木 保 興	放送大学教授
胡椒が会社制度を作った	東 條 正	放送大学長崎学習センター所長
言語の仕組みと多様性を考える	稲 田 俊 明	長崎大学言語教育研究センター教授
古写真に見る世界史の中の長崎	姫 野 順 一	長崎大学名誉教授
陶磁器からみた文化交流史	野 上 建 紀	長崎大学多文化社会学部准教授
インシュタインは何を考えたか	米 谷 民 明	放送大学教授

平成 26 年度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
アメリカ文学に描かれた多文化	山 田 健太郎	長崎県立大学国際情報学部准教授
西洋美術史	針 貝 綾	長崎大学教育学部准教授
芭蕉と去来の文芸	若 木 太 一	長崎大学名誉教授
経済ジャーナリズム入門	森 川 裕 二	長崎大学多文化社会学部准教授
フランスの歴史と文化	正 本 忍	長崎大学多文化社会学部准教授
西洋医学史と絵画、音楽、山	山 本 太 郎	長崎大学熱帯医学研究所教授
フランス語入門	大 橋 絵 理	長崎大学言語教育研究センター教授
生活のための公衆衛生学	管 原 正 志	西九州大学健康福祉学部教授
クスリの起原と効くしくみ	西 田 孝 洋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
いのちをささえる分子応答学	鈴 木 啓 司	長崎大学原爆後障害医療研究所准教授
心理学実験 1	村 田 義 幸	長崎総合科学大学特任教授
カウンセリング論	田 山 淳	長崎大学障がい者支援室准教授
協同の経済	木 村 務	長崎県立大学経済学部教授
観光と地域づくり	山 口 純 哉	長崎大学経済学部准教授
美術館教育と美術館経営の動向	米 田 耕 司	長崎県美術館館長
博物館で楽しむ長崎の歴史と文化	深 瀬 公一郎	長崎歴史文化博物館研究員
	岡 本 健一郎	長崎歴史文化博物館研究員
	植 松 有 希	長崎歴史文化博物館研究員
C 言語プログラミング入門 1	森 本 容 介	放送大学准教授
海洋生物環境学実習	征矢野 清	長崎大学環東シナ海環境資源研究センター教授

平成 27 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
初歩からのパソコン	仁 科 工 ミ	放送大学教授
五島灘洋上実習	兼 原 壽 生	長崎大学水産学部教授
	山 脇 信 博	長崎大学水産学部准教授
	八 木 光 晴	長崎大学水産学部助教
身近な科学	山 路 裕 昭	長崎大学大学院教育学研究科教授
	隅 田 祥 光	長崎大学教育学部准教授
	福 山 隆 雄	長崎大学教育学部准教授
	大 庭 伸 也	長崎大学教育学部准教授
歌で学ぶ英語表現	小笠原 真 司	長崎大学言語教育研究センター教授
中国語入門	楊 暁 安	長崎大学言語教育研究センター教授
医療と健康	永 田 耕 司	活水女子大学看護学部教授
ライフステージと健康	宮 原 春 美	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	江 藤 宏 美	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	森 藤 香 奈 子	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科准教授
	橋 爪 可 織	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科助教
イメージを用いた心理療法	小 野 けい子	放送大学教授
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎純心大学非常勤講師
近代国際法と日本	石 司 真由美	長崎大学多文化社会学部助教
日本財政の課題と展望	赤 石 孝 次	長崎大学経済学部教授
港湾都市長崎の近代都市形成史	岡 林 隆 敏	長崎大学名誉教授
アジアの国際結婚	賽 漢 卓 娜	長崎大学多文化社会学部准教授
欧州の多文化社会とその課題	見 原 礼 子	長崎大学多文化社会学部准教授
近代以前の日本経済	柴 多 一 雄	長崎大学名誉教授
情報科学概論	黒 川 不 二 雄	長崎大学大学院工学研究科教授
くらしの中の環境問題	武 政 剛 弘	長崎大学名誉教授
動物の行動 - その進化と多様性	山 口 典 之	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授

平成 27 年度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
芥川龍之介と遠藤周作の文学	下 野 孝 文	長崎県立大学国際情報学部教授
インド洋世界の歴史	鈴 木 英 明	長崎大学多文化社会学部准教授
カエル三昧 (学んで見て触れて)	松 尾 公 則	長崎女子短期大学非常勤講師
言葉の意味と法則を探る	稲 田 俊 明	長崎大学言語教育研究センター教授
身体活動と健康の科学	管 原 正 志	西九州大学健康福祉学部教授
社会福祉演習 - 障害児の福祉 -	大 曾 根 寛	放送大学教授
看護学概論	浦 田 秀 子	長崎大学原爆後障害医療研究所教授
認知症の基礎	城 谷 圭 朗	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科准教授
心理学実験 2	山 地 弘 起	長崎大学大学院教育イノベーションセンター教授
心理学実験 1	前 原 由 喜 夫	長崎大学教育学部准教授
長崎県の地域ブランド構築	山 口 夕 妃 子	佐賀大学経済学部教授
国際社会と女性の人権	近 江 美 保	長崎大学多文化社会学部准教授
宗教と呪術から見た人類学思想史	内 堀 基 光	放送大学教授
博物館で学ぶ長崎の歴史	深 瀬 公 一 郎	長崎歴史文化博物館研究員
	林 美 和	長崎歴史文化博物館研究員
	矢 田 純 子	長崎歴史文化博物館研究員
出島・唐人屋敷の基礎と保存活用	本 馬 貞 夫	長崎県文化振興課長崎学アドバイザー
生活と環境の民俗学	増 田 研	長崎大学多文化社会学部准教授
自然から学ぶ新技術と生活	馬 場 恒 明	長崎県工業技術センター所長
	兵 頭 竜 二	長崎県工業技術センターグリーンニューディール技術開発支援室長

平成 28 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
初歩からのパソコン	藤 村 誠	長崎大学大学院工学研究科准教授
初級中国語	高 山 乾 忠	長崎ウエスレヤン大学現代社会学部教授
英語で読む日本文学	加 島 巧	長崎外国語大学外国語学部教授
生物統計学入門	西 田 孝 洋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
認知症の理解と支援	加 藤 稔 子	西九州大学健康福祉学部講師
健康問題とセルフケア	宮 原 春 美	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	森 藤 香 奈 子	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科准教授
	黒 田 裕 美	日本赤十字九州国際看護大学看護学部助教
	佐々木 規 子	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科助教
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎純心大学非常勤講師
感情の心理学	加 來 秀 俊	活水女子大学文学部教授
発達障害の児童生徒への心理支援	吉 田 ゆ り	長崎大学教育学部教授
パレスチナ難民問題	高 橋 和 夫	放送大学教授
	高 橋 真 樹	ジャーナリスト
事例で学ぶ企業経営	吉 田 高 文	長崎大学名誉教授
世界経済の形成	松 本 睦 樹	長崎大学経済学部教授
ピアノ音楽の魅力について	堀 内 伊 吹	長崎大学教育学部教授
ことばの来し方	前 田 桂 子	長崎大学教育学部准教授
学術情報の検索と管理	三 輪 眞 木 子	放送大学教授
ICT 基礎とスキル	全 炳 徳	長崎大学教育学部教授
	瀬戸崎 典 夫	長崎大学教育学部准教授
科学入門	山 路 裕 昭	長崎大学大学院教育学研究科教授
	隅 田 祥 光	長崎大学教育学部准教授
	福 山 隆 雄	長崎大学教育学部准教授
	大 庭 伸 也	長崎大学教育学部准教授

平成 28 年度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
心のセルフケア	田 山 淳	長崎大学大学院教育学研究科准教授
わかりやすい「健康と衛生学」	管 原 正 志	西九州大学健康福祉学部教授
生活習慣と健康そしてケア	浦 田 秀 子	長崎大学原爆後障害医療研究所教授
心理学実験 1	前 原 由 喜 夫	長崎大学教育学部准教授
心理学実験 2	原 田 純 治	長崎大学教育学部教授
海洋の制度と水産業	片 岡 千 賀 之	長崎大学名誉教授
日本と中国の比較社会研究	首 藤 明 和	長崎大学多文化社会学部教授
日本庭園の文化と美意識	五 島 聖 子	長崎大学環境科学部教授
ことばの獲得と言語の仕組み	稲 田 俊 明	長崎大学言語教育研究センター教授
サンティアゴ巡礼と中世の美術	浅 野 ひ と み	長崎純心大学人文学部教授
くずし字で「百人一首」を読む	椎 葉 富 美	長崎純心大学人文学部教授
国際都市長崎の歴史と文化	林 美 和	長崎歴史文化博物館研究員
	矢 田 純 子	長崎歴史文化博物館研究員
	五 味 俊 晶	長崎歴史文化博物館研究員
コンピュータ・ハードウェア基礎	黒 川 不 二 雄	長崎大学大学院工学研究科教授
地球のシステムを読み解く	大 森 聡 一	放送大学准教授
水産物の品質と科学	橘 勝 康	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授
歴史学と生物学のコラボ	松 尾 公 則	長崎女子短期大学非常勤講師
	本 馬 貞 夫	長崎県文化振興課長崎学アドバイザー

平成 29 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
英語のしくみー音と意味ー	西 原 俊 明	長崎大学言語教育研究センター教授
現代科学入門	山 路 裕 昭	長崎大学名誉教授
	工 藤 哲 洋	長崎大学教育学部准教授
	福 山 隆 雄	長崎大学教育学部准教授
	大 庭 伸 也	長崎大学教育学部准教授
	隅 田 祥 光	長崎大学教育学部准教授
脳の機能と障害の理解	鈴 木 保 巳	長崎大学教育学部教授
開発と女性の健康	松 山 章 子	名古屋大学大学院医学系研究科国際保健・公衆衛生学客員研究者
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎リハビリテーション学院非常勤講師
臨床心理学実習	佐 藤 仁 美	放送大学准教授
途上国の人々の生活	和 田 一 哉	長崎県立大学国際社会学部准教授
法学概論	村 山 洋 介	長崎大学経済学部教授
伝統染織概論	寺 田 貴 子	活水女子大学健康生活学部教授
温泉と文化：日本とヨーロッパ	大 橋 絵 理	長崎大学言語教育研究センター教授
史料が語る江戸時代の長崎	松 尾 晋 一	長崎県立大学地域創造学部准教授
日常生活に生かすユーザ調査法	高 橋 秀 明	放送大学准教授
五島灘洋上実習	森 井 康 宏	長崎大学水産学部教授（練習船長崎丸船長）
	山 脇 信 博	長崎大学水産学部准教授
	八 木 光 晴	長崎大学水産学部助教
身の回りの薬用資源と健康生活	山 田 耕 史	長崎大学医歯薬学総合研究科附属薬用植物園准教授
海藻の不思議	桑 野 和 可	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授

平成 29 年度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
新・初歩からのパソコン	仁 科 エ ミ	放送大学教授
CNN ニュース英語リスニング	小笠原 真 司	長崎大学言語教育研究センター教授
生活環境情報学	川 原 靖 弘	放送大学准教授
生活科学・住居ー長崎の住空間ー	佐々野 好 継	長崎大学教育学部教授
楽しい健康とスポーツの科学	管 原 正 志	西九州大学健康福祉学部教授
緩和ケア・ターミナルケア	安 徳 弥 生	西九州大学健康福祉学部准教授
カウンセリング基礎理論	内 野 成 美	長崎大学大学院教育学研究科准教授
心理学実験 1	前 原 由 喜 夫	長崎大学教育学部准教授
心理学実験 2	加 來 秀 俊	活水女子大学文学部教授
三菱財閥の成立と発展	東 條 正	放送大学長崎学習センター所長
長崎の戦後文学入門	長 野 秀 樹	長崎純心大学人文学部教授
桐壺更衣のものがたり	椎 葉 富 美	長崎純心大学人文学部教授
子ども文化論	上 出 恵 子	活水女子大学健康生活学部教授
ことばと心ー多様性と規則性	稲 田 俊 明	長崎大学言語教育研究センター教授
情報科学と新たな産業革命	江 藤 春 日	長崎大学大学院工学研究科教授
薬のはたらくしくみ	川 上 茂	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
電気エネルギー入門	武 藤 浩 二	長崎大学教育学部教授
	藤 本 登	長崎大学教育学部教授

平成30年度第1学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
音楽を楽しむための7つの視点	堀 内 伊 吹	長崎大学教育学部教授
長崎くんちの凡て	本 馬 貞 夫	長崎県文化振興課長崎学アドバイザー
身近にある ICT 活用を知ろう	丹 羽 量 久	長崎大学 ICT 基盤センター教授

自然科学入門	山路裕昭	長崎大学名誉教授
	大庭伸也	長崎大学教育学部准教授
	及川大地	長崎大学教育学部准教授
	工藤哲洋	長崎大学教育学部准教授
薬物送達システムのしくみと進歩	西田孝洋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
心理学実験 3	橋口晋	長崎リハビリテーション学院非常勤講師
バイオマスを利用する地域と技術	迫田章義	放送大学教授
安全とリスク	中西善信	長崎大学経済学部准教授
日常生活と法	池谷和子	長崎大学教育学部准教授
江戸時代の「鎖国」って？	松尾晋一	長崎県立大学地域創造学部教授
西洋芸術の歴史と理論	青山昌文	放送大学教授
戦争と慰霊の歴史地理	大平晃久	長崎大学教育学部准教授
対馬暖流域における海洋物理現象	滝川哲太郎	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授
五島灘洋上実習	森井康宏	長崎大学水産学部教授（練習船長崎丸船長）
	山脇信博	長崎大学水産学部准教授
	八木光晴	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授

平成 30 年度第 2 学期

授業科目名	担当講師名	所属・職名
簡単な英語で読む英語史	加島巧	長崎外国語大学外国語学部教授
中国語表現	楊暁安	長崎大学言語教育研究センター教授
発達科学の巨人たち	岩永雅也	放送大学教授
プログラミング事始め	丹羽量久	長崎大学 ICT 基盤センター教授
	上繁義史	長崎大学 ICT 基盤センター准教授
	鈴木斉	長崎大学経済学部講師
代数入門	島袋修	長崎大学教育学部准教授
身体運動文化の理解	田井健太郎	長崎国際大学人間社会学部講師
終活と向きあう	安徳弥生	西九州大学健康福祉学部准教授
ストレスマネジメント	田山淳	長崎大学大学院教育学研究科准教授
心理学実験 1	前原由喜夫	長崎大学教育学部准教授
心理学実験 2	加來秀俊	長崎大学教育学部特任准教授
日本経済をめぐる諸思想の歴史	南森茂太	長崎大学経済学部准教授
環境哲学・倫理学	関陽子	長崎大学環境科学部准教授
長崎の美術史と美術館教育	森園敦	長崎県美術館学芸員
	松久保修平	長崎県美術館学芸員
	川口佳子	長崎県美術館学芸員
	守屋聡	長崎県美術館チーフエドゥケーター
宮崎友里子	長崎県美術館エドゥケーター	
日本文学に見る中国文学の影響	中島貴奈	長崎大学教育学部准教授
鯨類の生物学と保全	天野雅男	長崎大学水産学部教授
水環境と人間生活の科学	利部慎	長崎大学環境科学部助教

令和元年（平成 31 年）度第 1 学期

授業科目名	担当講師名	所属・職名
幕末の長崎を英語で読み解く	小笠原真司	長崎大学言語教育研究センター教授
初歩のフランス語	大橋絵理	長崎大学言語教育研究センター教授
新・初歩からのパソコン	丹羽量久	長崎大学 ICT 基盤センター副センター長 / 教授
物語と音楽	堀内伊吹	長崎大学教育学部教授
教養としての自然科学	山路裕昭	長崎大学名誉教授
	大庭伸也	長崎大学教育学部准教授
	及川大地	長崎大学教育学部准教授
	工藤哲洋	長崎大学教育学部准教授

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
地球の活動	馬 越 孝 道	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授
からだと病気のしくみ	西 田 孝 洋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
健康寿命延伸に向けての取組	伊 東 昌 子	放送大学長崎学習センター所長
	永 田 康 浩	長崎大学医学部地域包括ケア教育センター教授
	松 坂 誠 應	長崎リハビリテーション病院地域リハビリテーション統括
	井 口 茂	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎リハビリテーション学院非常勤講師
発達心理学	加 来 秀 俊	長崎大学大学院教育学研究科准教授
ヨーロッパの政治と経済	成 田 真樹子	長崎大学経済学部准教授
日本国憲法	池 谷 和 子	長崎大学教育学部准教授
都市長崎の近代史	木 永 勝 也	長崎総合科学大学共通教育部門准教授
江戸時代に伝わった海外情報	松 尾 晋 一	長崎県立大学地域創造学部教授
明治期長崎が求めた「手書き力」	鈴 木 慶 子	長崎大学教育学部教授
核物理の初歩と今日の核問題	松 井 哲 男	放送大学教授
五島灘洋上実習	森 井 康 宏	長崎大学水産学部教授（練習船長崎丸船長）
	山 脇 信 博	長崎大学水産学部准教授

令和元年（平成 31 年）度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
韓国語基礎	劉 卿 美	長崎大学言語教育研究センター教授
知の拠点・図書館入門	浜 口 美由紀	長崎純心大学人文学部教授
老いと向きあう	安 徳 弥 生	西九州大学健康福祉学部准教授
生涯発達と脳の心理学	富 永 大 介	放送大学沖縄学習センター所長
心理学実験 1	前 原 由喜夫	長崎大学教育学部准教授
心理学実験 2	加 来 秀 俊	長崎大学大学院教育学研究科准教授
長崎の観光と地域経済	山 口 純 哉	長崎大学経済学部准教授
中国音楽の世界	王 維	長崎大学多文化社会学部教授
潜伏キリシタン関連遺産の考察	本 馬 貞 夫	長崎県長崎学アドバイザー
長崎から見た世界と日本	木 村 直 樹	長崎大学多文化社会学部教授
地球大気の特徴と地球温暖化	河 本 和 明	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授
生物同士の関わり合いと人間社会	服 部 充	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科助教
e ラーニングと電子出版入門	山 田 恒 夫	放送大学教授
異文化コミュニケーション論	丸 山 真 純	長崎大学経済学部准教授

令和 2 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のため全面的に閉講		

令和 2 年度第 2 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
フランス語会話入門	大 橋 絵 理	長崎大学言語教育研究センター教授
日常生活の情報セキュリティ	上 繁 義 史	長崎大学 ICT 基盤センター准教授
人生 100 年時代の人権教育	江 頭 明 文	長崎大学大学院教育学研究科非常勤講師
ヒューマン・セクシュアリティ	宮 原 春 美	長崎大学名誉教授
児童虐待を多面的に科学する	池 松 和 哉	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	柿 田 多佳子	長崎純心大学准教授
	加 来 洋 一	長崎こども・女性・障害者支援センター所長
	山 下 裕 美	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科助教
	鮎 川 愛	弁護士

感染症と人類	片 峰 茂	長崎大学名誉教授
	山 本 太 郎	長崎大学熱帯医学研究所教授
心理学実験 1	前 原 由喜夫	長崎大学教育学部准教授
心理学実験 2	加 來 秀 俊	長崎大学大学院教育学研究科准教授
スクールカウンセリング	内 野 成 美	長崎大学大学院教育学研究科教授
くらしの中の力学～構造工学入門	原 田 哲 夫	長崎大学名誉教授
地域経済の持続可能性	山 口 純 哉	長崎大学経済学部准教授
国境の島 - 壱岐・対馬・五島 -	本 馬 貞 夫	長崎県長崎学アドバイザー
伝統的絵画表現	牧 野 一 穂	長崎大学教育学部准教授
資料からわかる前近代の長崎港	松 尾 晋 一	長崎県立大学地域創造学部教授
	大 塚 俊 司	長崎歴史文化博物館研究員
情報ネットワークとサービス	芝 崎 順 司	放送大学教授
水産物の生化学	吉 田 朝 美	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科准教授
放射線といのち	松 田 尚 樹	長崎大学原爆後障害医療研究所教授
	鈴 木 啓 司	長崎大学原爆後障害医療研究所准教授
	山 内 基 弘	長崎大学原爆後障害医療研究所助教

令和3年度第1学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
多読教材と映画で学ぶ英語	小笠原 真 司	長崎大学言語教育研究センター教授
名曲が奏でる音の風景	堀 内 伊 吹	長崎大学教育学部教授
表計算ソフトの実用講座	丹 羽 量 久	長崎大学 ICT 基盤センター教授
地域包括ケアの理論と実践	永 田 康 浩	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科地域医療学分野教授
	田 中 一 成	長崎県立大学地域連携センター教授
	辻 敏 子	島原市地域包括支援センター所長
	原 口 尚 久	前長崎市民健康部兼こども部次長
	伊 東 昌 子	放送大学長崎学習センター所長
	井 口 茂	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
	手 嶋 無 限	長崎大学医学部非常勤講師
薬と毒：表裏一体の科学	西 田 孝 洋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
子どもの心の傷トラウマ	花 田 裕 子	長崎大学名誉教授
子どもの健康と環境	森 藤 香奈子	長崎大学生命医科学域保健学系准教授
	佐々木 規 子	長崎大学生命医科学域保健学系准教授
	本 多 直 子	長崎大学生命医科学域保健学系助教
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎リハビリテーション学院非常勤講師
心理検査法基礎実習	吉 田 ゆ り	長崎大学教育学部教授
教育と学校を再考する	中 島 ゆ り	長崎大学大学教育イノベーションセンター准教授
日常生活と民法	池 谷 和 子	長崎大学教育学部准教授
マーケティングと消費者行動	高 橋 史 早	長崎大学経済学部助教
企業情報開示のダイナミズム	林 川 万理水	長崎大学経済学部准教授
プレゼンテーションの理論と実践	加 藤 浩	放送大学教授
五島灘洋上実習	森 井 康 宏	長崎大学水産学部教授（練習船長崎丸船長）
	山 脇 信 博	長崎大学水産学部准教授（練習船長崎丸一等航海士）
天文学と化学のリテラシー	星 野 由 雅	長崎大学大学院教育学研究科教授
	工 藤 哲 洋	長崎大学教育学部教授
銀河天文学	谷 口 義 明	放送大学教授

令和3年度第2学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
中国の言語と文化	楊 曉 安	長崎大学言語教育研究センター教授
実体験型コンピュータ教育	丹 羽 量 久	長崎大学 ICT 基盤センター教授
	上 繁 義 史	長崎大学 ICT 基盤センター准教授
	鈴 木 齊	長崎大学人文社会科学域（経済学系）講師

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
児童虐待を多面的に科学する	池 松 和 哉	長崎大学生命医科学域（医学系）教授
	柿 田 多佳子	長崎純心大学准教授
	加 来 洋 一	長崎こども・女性・障害者支援センター所長
	山 下 裕 美	長崎大学生命医科学域（歯学系）助教
	鮎 川 愛	弁護士
健康長寿の鍵：骨と筋と関節	伊 東 昌 子	長崎大学理事
	千 葉 恒	長崎大学生命医科学域（医学系）助教
性と生	宮 原 春 美	長崎大学名誉教授
心理学実験 1	前 原 由喜夫	長崎大学人文社会科学域（教育学系）准教授
心理学実験 2	加 来 秀 俊	長崎大学人文社会科学域（教育学系）准教授
学校カウンセリング技法	内 野 成 美	長崎大学人文社会科学域（教育学系）教授
臨床心理学実習	佐 藤 仁 美	放送大学准教授
地域経済とソーシャルビジネス	山 口 純 哉	長崎大学人文社会科学域（経済学系）准教授
伝統的絵画表現	牧 野 一 穂	長崎大学人文社会科学域（教育学系）准教授
長崎から見た世界と日本	木 村 直 樹	長崎大学人文社会科学域（多文化社会学系）教授
統計解析環境 R による統計学入門	宇都宮 讓	長崎大学人文社会科学域（経済学系）准教授
放射線といのち	松 田 尚 樹	長崎大学原爆後障害医療研究所教授
	鈴 木 啓 司	長崎大学原爆後障害医療研究所准教授
	山 内 基 弘	九州大学アイトープ統合安全管理センター准教授
水産物の生化学 2	吉 田 朝 美	長崎大学総合生産科学域（水産学系）准教授
地熱・温泉エネルギー入門	馬 越 孝 道	長崎大学総合生産科学域（環境科学系）教授
銀河天文学	谷 口 義 明	放送大学教授
未来のエネルギーと原子力発電	藤 本 登	長崎大学人文社会科学域（教育学系）教授

令和 4 年度第 1 学期

授 業 科 目 名	担 当 講 師 名	所 属・職 名
物忘れ予防と認知症予防	井 出 訓	放送大学教授
今さら聞けないネット技術の本質	小 林 透	長崎大学総合生産科学域（情報データ科学系）教授
パルス・パワー技術	山 下 敬 彦	放送大学長崎学習センター所長
	古 里 友 宏	長崎大学総合生産科学域（工学系）准教授
ミュージアムと社会	小 坂 智 子	長崎県美術館館長
心理学実験 3	橋 口 晋	長崎リハビリテーション学院非常勤講師
生物統計の基礎と実践	西 田 孝 洋	長崎大学生命医科学域（薬学系）教授
子どもの健康と環境	森 藤 香奈子	長崎大学生命医科学域（保健学系）教授
	佐々木 規 子	長崎大学生命医科学域（保健学系）准教授
	本 多 直 子	長崎大学生命医科学域（保健学系）助教
フランス文学と「ロマン」の探求	野 崎 歡	放送大学教授
魚類の自然誌と海の生態系保全	山 口 敦 子	長崎大学総合生産科学域（水産学系）教授
英語で楽しくコミュニケーション	Benom Carey	長崎大学言語教育研究センター助教
ピアノで楽しむ大作曲家の小品集	堀 内 伊 吹	長崎大学人文社会科学域（教育学系）教授
住まいの建築計画	安 武 敦 子	長崎大学総合生産科学域（工学系）教授
心理検査法基礎実習	吉 田 ゆ り	長崎大学人文社会科学域（教育学系）教授
五島灘洋上実習	森 井 康 宏	長崎大学総合生産科学域（水産学系）教授
	山 脇 信 博	長崎大学総合生産科学域（水産学系）准教授
Word と Excel の入門講座	丹 羽 量 久	長崎大学 ICT 基盤センター教授
ジェンダーで読み解く現代社会	中 島 ゆ り	長崎大学大学教育イノベーションセンター准教授
刑法と裁判員制度	池 谷 和 子	長崎大学人文社会科学域（教育学系）准教授

5 公開講座（公開講演会）

（平成 23 年度第1学期～令和4年度第1学期）

年 度	学 期	担 当 教 員	演 題
平成 23 年度	1 学期	田井村 明 博	暑さ・寒さに対する適応
		若 木 太 一	鎮魂「おくの細道」
		杉 原 敏 夫	経済の動きを見る目を養おう
		貞 森 直 樹	成人 T 細胞白血病（ALT）
		進 野 智 子	ほめる前に・叱る前に
		篠 原 駿 一 郎	安楽死の倫理
	2 学期	進 野 智 子	幼児期の重要性
		平 岡 隆 二	孫文と梅谷庄吉との関わり
		篠 原 駿 一 郎	生命科学技術による人間改造（エンハンスメント）の倫理
		貞 森 直 樹	メタボリックシンドローム
		杉 原 敏 夫	経済の動きを見る目を養おう（国際経済との関わりを主として）
		田井村 明 博	運動と栄養
		若 木 太 一	隠元禅師とその時代
ゲリーメイソン	エンジョイイングリッシュ①②③		
24 年度	1 学期	西 田 孝 洋	クスリの宅配便
		田井村 明 博	何のためにスポーツをするのか？
		杉 原 敏 夫	地域の実情と地域経済への理解を深めよう
		進 野 智 子	「発達」あれこれ
		篠 原 駿 一 郎	論理学入門
		早 瀬 隆 司	環境リスクと公共性
	2 学期	西 田 孝 洋	からだの抵抗性
		田井村 明 博	暑さに負けない体力づくり
		原 田 博 二	江戸時代の長崎の制度と町人の暮らし
		篠 原 駿 一 郎	般若心経を哲学的に読む
		杉 原 敏 夫	経済効果の把握の考え方（産業連関表入門）
		進 野 智 子	ランドセルにつめる夢 ー保育所・幼稚園から小学校への接続ー
		ゲリーメイソン	楽しい英会話
早 瀬 隆 司	「環境アセスメント」って、「何」		
25 年度	1 学期	杉 原 敏 夫	ソフトテクノロジーとその進展
		管 原 正 志	熱中症を知ろう～日常生活における熱中症予防～
		西 田 孝 洋	アルコールと肝臓の話
		橋 口 晋	「私はこれで痩せました」という広告をどう疑うか（経験談論法の罫）クリティカルシンキングのすすめ
		篠 原 駿 一 郎	英語の名曲を学びましょう
		早 瀬 隆 司	長崎とジャカルタ 持続可能な開発のための教育
	2 学期	橋 口 晋	何を原因と考えるかが重要だ クリティカルシンキング入門その 2
		仁 位 孝 雄	友好交流を支えた・苦難の 4000 キロ「朝鮮通信使の道」
		管 原 正 志	今からはじめよう健康づくり
		早 瀬 隆 司	長崎とジャカルタ 再び持続可能な開発のための教育
		篠 原 駿 一 郎	魂の不死について
		ゲリーメイソン	エンジョイイングリッシュ①②③
		西 田 孝 洋	わかりやすい統計と確率
杉 原 敏 夫	テキストマイニングとは		

年度	学期	担当教員	演 題
26年度	1学期	西田孝洋	身近なクスリの歴史
		菅原正志	日常生活でも起こる熱中症を知り予防する
		柴多一雄	鯨組深沢家と大村藩
		橋口晋	解決へ一歩近づく目標の立て方
		武政剛弘	戦後から70年日本が歩んだ環境への取り組み
	2学期	武政剛弘	地球温暖化と食料事情
		菅原正志	世界史・日本史にみる健康に関する歴史の変遷
		グリーメイソン	英会話講座①②③
		橋口晋	学校カウンセリングの現場から
		西田孝洋	遺伝子治療の現状と課題、そして未来
柴多一雄	九州二都物語ー長崎と博多・福岡ー		
27年度	1学期	橋口晋	リラクセーションの方法
		菅原正志	運動と平均(健康)寿命
		武政剛弘	環境問題を数量的にとらえよう
		浦田秀子	放射線と健康
		山路裕昭	日本の子どもたちの理科学力は大丈夫か?
		西田孝洋	薬物送達システム(ドラッグデリバリーシステム, DDS)の進歩
	2学期	浦田秀子	放射線災害からの復興
		菅原正志	寒さからだ〜運動は耐寒性を向上させる〜
		武政剛弘	くらしに利用している水の不思議な力
		山路裕昭	子どもたちの成績はどのようにつけられてきたか
		橋口晋	実験神経症から学ぶ心の病気のメカニズム
		西田孝洋	ストレスと疲労の科学
		下野孝文	芥川龍之介と遠藤周作の文学
28年度	1学期	菅原正志	猛暑を乗り越える健康管理
		橋口晋	愛着理論と3歳児神話
		稲田俊明	日本語と英語の違いから探る英語の仕組み
		山路裕昭	子どもたちは学校で何を学ぶか?
		浦田秀子	放射線被ばくと健康影響
		西田孝洋	クスリの副作用と毒性
	2学期	山路裕昭	子どもたちの自然の見方
		橋口晋	ハマる心理について
		浦田秀子	放射線を理解しよう
		菅原正志	オリンピックの歴史ーオリンピックから東京へー
		稲田俊明	英語と比べて分かる日本語の仕組み
西田孝洋	健康づくりに肝腎な肝臓と腎臓の話		
29年度	1学期	菅原正志	中高年の夏季における健康障害予防と対策
		橋口晋	コミュニケーションスキルのトレーニング
		川上茂	くすりの知識:品質と効果を最大限に引き出す方法
	2学期	山路裕昭	学校は変わるか?ー新学習指導要領の目指すものー
		稲田俊明	言葉から探る心の創造性と規則性
		森津太子	心理学を学びたい方向け 公開講演会

年度	学期	担当教員	演 題
30年度	1学期	田 山 淳	ストレスの科学
		山 路 裕 昭	長崎県の児童・生徒の学力について
	2学期	堀 内 伊 吹	季節を巡る音楽
		西 田 孝 洋	科学分野におけるセレンディピティ：失敗から学ぼう
		森 津 太 子	心理学を学びたい方向け 公開講演会 「心理学の可能性 ～認知バイアスの功罪を考える～」
31年度 / 令和 元年度	1学期	西 田 孝 洋	エネルギー代謝の不思議
		丹 羽 量 久	身の回りの「情報」とその見える化
		山 路 裕 昭	市民にとっての自然科学と科学者
	2学期	伊 東 昌 子	知っておきたい骨粗鬆症の知識
		堀 内 伊 吹	歌謡曲、ヒット曲で振り返る平成
		加 来 秀 俊	勇気づけの心理学
		高 田 明	夢持ち続け日々精進 ～変える勇気と行動を～ (長崎大学ダイバーシティ推進センターとの共催)
2年度	1学期		
	2学期	木 村 直 樹	リレー公開講座『長崎の歴史から未来を考える』 鎖国再考ー国際都市長崎から考える
		南 森 茂 太	リレー公開講座『長崎の歴史から未来を考える』 長崎海軍伝習所における欧米の諸知識・諸技術の受容について
		才 津 祐 美 子	リレー公開講座『長崎の歴史から未来を考える』 「潜伏キリタン関連遺産」の問題点と今後の課題
		花 田 裕 子	赤ちゃんや幼児の愛着ってどんなこと?～人のこころの安全基地ができる話～
		丹 野 智 文	若年性認知症とともに生きる (長崎大学ダイバーシティ推進センターとの共催)
		平 山 亮	男たちよ、親の介護にどう向き合うつもり? (長崎大学ダイバーシティ推進センターとの共催)
3年度	1学期	堀 内 伊 吹	マダム・バタフライ～プッチーニと長崎をつなぐ
		花 田 裕 子	リレー公開講座『自分らしく生きるために』 自己肯定感の育つ環境を考えてみましょう
		永 谷 研 一	リレー公開講座『自分らしく生きるために』 できたことノート実践講座
		伊 東 昌 子	リレー公開講座『自分らしく生きるために』 あなたにもある無意識の偏見
		上 繁 義 史	日常の情報セキュリティ、最初の一步
	2学期	加 来 秀 俊	ニオイの心理学
		矢 野 香	オンラインでの「伝え方」のコツ
		西 田 孝 洋	クスリの体内での運命と効果
		本 田 美 和 子	優しさを伝えるケア技術：ユマニチュード～認知症の方の生活を支えるために～
		丹 羽 量 久	オンラインコミュニケーションの気遣い
4年度	1学期	岩 永 雅 也	ポストコロナ時代の放送大学 ～ピンチを奇貨として～
		増 崎 英 明	長崎のはじまりの頃
		堀 内 伊 吹	記憶を呼び覚ます装置としての映像と音楽
		山 下 樹 三 裕	環境ホルモンって何?
		姫 野 順 一	写真で振り返る港町長崎の歴史 ～幕末・明治・大正・昭和～

6 学生研修旅行

年 度	実施日	研 修 場 所	参 加 者
平成 23年度	11/4 (金)	○鷹島歴史民俗資料館 (松浦市)	人
		○モンゴル村 (松浦市)	学生 34
		○旧高取邸 (佐賀県唐津市)	職員 3
		○ポンポコ村 (ベゴニアガーデン) (佐賀県唐津市)	計 37
24年度	11/1 (木)	○南蔵院 (参拝) (福岡県粕屋郡篠栗町)	学生 37
		○石炭・歴史博物館 (福岡県田川市)	職員 3 計 40
25年度	11/7 (木)	○石橋美術館 (福岡県久留米市)	学生 40
		○アサヒコーポレーション (工場見学) (福岡県久留米市)	職員 3
		○青木繁旧居 (福岡県久留米市)	計 43
26年度	11/5 (水)	○八丁原地熱発電所 (大分県玖珠郡九重町)	学生 37
		○女子畑水力発電所 (大分県日田市)	職員 3 計 40
27年度	11/6 (金)	○九州国立博物館 (福岡県太宰府市)	学生 40
		○太宰府天満宮 (福岡県太宰府市)	職員 3
		○株式会社エフピコ (トレイ再生工場見学) (佐賀県)	計 43
28年度	11/16 (木)	○キューピー鳥栖工場 (佐賀県鳥栖市)	学生 37
		○三重津海軍所跡 (佐賀県佐賀市)	職員 2
		○佐野常民記念館 (佐賀県佐賀市)	計 39
29年度	11/14 (火)	○泉山磁石場・内山地区 (佐賀県有田町)	学生 37
		○有田館 (磁器製人形劇上演) (佐賀県有田町)	職員 3
		○九州陶磁文化館 (佐賀県有田町)	計 40
30年度	11/15 (木)	○蔽木・環境芸術の森 (佐賀県唐津市)	学生 40
		- 肥前さが幕末維新博覧会 -	職員 3
		○幕末維新記念館 (佐賀県佐賀市)	計 43
		○佐賀城本丸歴史館 (佐賀県佐賀市)	
令和 元年度	11/20 (水)	○田平天主堂 (平戸市)	学生 31
		○平戸市内散策 (平戸観光ウェルカムガイド)	職員 3
		○松浦史料博物館 (松浦市)	計 34
2年度 ～ 4年度		新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 感染防止のため中止	

※令和2年度は、学生研修旅行に代えて、リレー公開講座のテーマに沿った特別企画「解説付きれきぶんツアー」を2020年11月19日に長崎歴史文化博物館において開催した。

7 施設概要

建物の位置・使用区分等

長崎大学文教キャンパスの長崎大学附属図書館南側

附属図書館との合築棟（4階建 エレベータ完備）

学習センター占有部分は3階・4階全フロア

各フロア実効面積

【3階部分：371㎡】

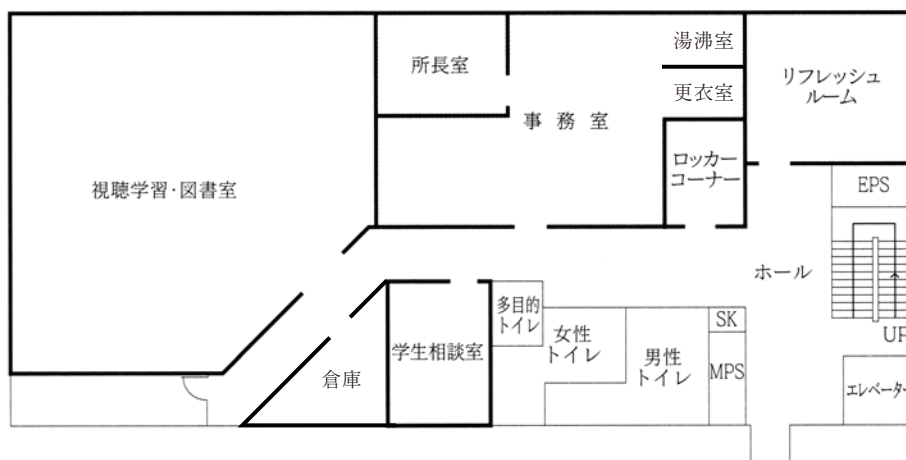
所長室 21㎡、事務室 73㎡、視聴学習・図書室 175㎡、リフレッシュルーム 39㎡、学生相談・保健室 23㎡、ロッカーコーナー 14㎡、更衣室・湯沸室・倉庫 26㎡

【4階部分：332㎡】

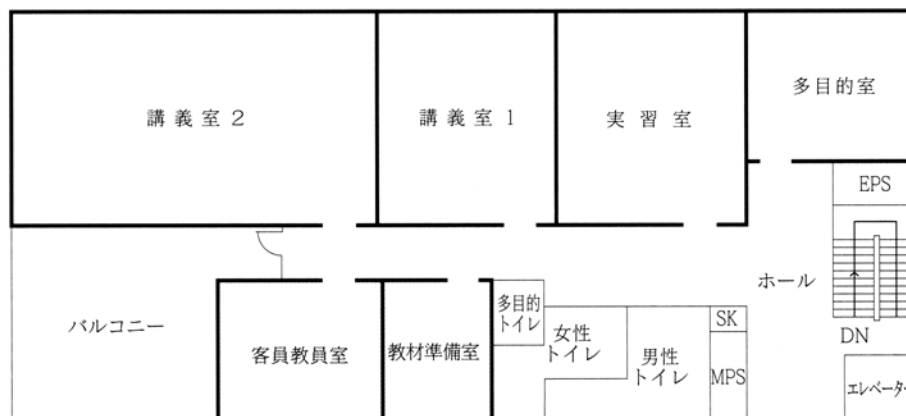
講義室1 58㎡、講義室2 117㎡、実習室 60㎡、教材準備室 23㎡、多目的室 39㎡、客員教員室 35㎡

平面図

(3階)



(4階)



8 歴任教職員スタッフ

	氏 名	在 任 期 間
歴代所長		
初代 所長	高 橋 清	平成 4年 4月～平成 9年 3月
第2代 所長	佐 伯 重 幸	平成 9年 4月～平成 13年 3月
第3代 所長	鹿 川 修 一	平成 13年 4月～平成 16年 3月
第4代 所長	浦 晟	平成 16年 4月～平成 20年 3月
第5代 所長	崎 山 毅	平成 20年 4月～平成 25年 3月
第6代 所長	東 條 正	平成 25年 4月～平成 31年 3月
第7代 所長	伊 東 昌 子	平成 31年 4月～令和 3年 8月
第8代 所長	山 下 敬 彦	令和 3年 9月～
客員教員	愛宕 八郎康隆	平成 7年 7月～平成 8年 3月
	溝 田 勉	平成 10年 9月～平成 22年 3月
	村 田 義 幸	平成 12年 4月～平成 22年 3月
	大 坪 喜 子	平成 12年 9月～平成 21年 3月
	若 木 太 一	平成 12年 9月～平成 24年 3月
	石 田 正 弘	平成 12年 9月～平成 22年 3月
	山 田 幸 子	平成 12年 9月～平成 16年 3月
	杉 山 博 昭	平成 16年 4月～平成 19年 3月
	田井村 明 博	平成 20年 4月～平成 25年 3月
	篠 原 駿一郎	平成 21年 4月～平成 26年 3月
	貞 森 直 樹	平成 22年 4月～平成 24年 3月
	進 野 智 子	平成 22年 4月～平成 25年 3月
	杉 原 敏 夫	平成 22年 4月～平成 26年 3月
	西 田 孝 洋	平成 24年 4月～平成 29年 3月
	//	平成 30年 4月～
	早 瀬 隆 司	平成 24年 4月～平成 26年 3月
	管 原 正 志	平成 25年 4月～平成 30年 3月
	橋 口 晋	平成 25年 4月～平成 30年 3月
	柴 多 一 雄	平成 26年 4月～平成 27年 3月
	武 政 剛 弘	平成 26年 4月～平成 28年 3月
	山 路 裕 昭	平成 27年 4月～令和 2年 3月
	浦 田 秀 子	平成 27年 4月～平成 29年 3月
	稲 田 俊 明	平成 28年 4月～平成 30年 3月
	川 上 茂	平成 29年 4月～平成 30年 3月
	堀 内 伊 吹	平成 30年 4月～
	田 山 淳	平成 30年 4月～平成 31年 3月
	加 來 秀 俊	平成 31年 4月～
	丹 羽 量 久	平成 31年 4月～
	片 峰 茂	令和 元年 8月～令和 3年 3月
	花 田 裕 子	令和 2年 5月～令和 3年 8月
	永 田 康 浩	令和 3年 4月～令和 4年 3月
	宮 原 春 美	令和 3年 9月～
	山 下 樹三裕	令和 4年 4月～

事務長（事務室長）	小園 勝郎	平成 4年 4月～平成 7年 3月
	岩村 知康	平成 7年 4月～平成 10年 3月
	山崎 直之	平成 10年 4月～平成 13年 3月
	才津 雅男	平成 13年 4月～平成 16年 3月
	金子 仁	平成 16年 4月～平成 19年 3月
	鳴海 幸雄	平成 19年 4月～平成 21年 6月
	佐藤 三郎	平成 21年 7月～平成 25年 3月
	宮原 俊夫	平成 25年 4月～平成 30年 3月
	山崎 雅彦	平成 30年 4月～令和 2年 3月
	柘植 喜代志	令和 2年 4月～
事務職員	倉森 喜彦	平成 4年 4月～平成 7年 3月
	鬼木 みどり	平成 4年 4月～平成 7年 3月
	久保 喜美子	平成 4年 4月～平成 7年 3月
	尾崎 とめ子	平成 4年 10月～平成 7年 9月
	永尾 智恵子	平成 4年 10月～平成 9年 3月
	江崎 ヨシエ	平成 6年 10月～平成 9年 3月
	宅嶋 文夫	平成 7年 4月～平成 8年 3月
	野口 洋子	平成 7年 4月～平成 10年 3月
	田中和 夫	平成 7年 4月～平成 7年 7月
	山内 清継	平成 7年 9月～平成 8年 3月
	喜瀬 賀洋子	平成 7年 10月～平成 11年 3月
	園田 孝	平成 8年 4月～平成 9年 3月
	尾形 博	平成 8年 4月～平成 10年 3月
	大杉 清三郎	平成 9年 4月～平成 11年 3月
	鶴山 奈々	平成 9年 4月～平成 10年 3月
	藤尾 幸子	平成 9年 10月～平成 10年 3月
	浅井 義久	平成 10年 4月～平成 13年 3月
	小柳 順子	平成 10年 4月～平成 13年 3月
	江口 和歌子	平成 10年 4月～平成 13年 3月
	河邊 佐知	平成 10年 4月～平成 14年 3月
	松尾 政美	平成 11年 4月～平成 13年 9月
	徳永 典子	平成 11年 4月～平成 15年 3月
	森内 和年	平成 13年 4月～平成 16年 3月
	柳原 明子	平成 13年 4月～平成 17年 3月
	原口 里香	平成 13年 8月～平成 16年 3月
	飴谷 壽一	平成 13年 10月～平成 16年 9月
	石丸 睦	平成 14年 4月～平成 18年 3月
	一瀬 桃子	平成 15年 4月～平成 19年 3月
	小川 源吾	平成 16年 4月～平成 18年 3月
	東 沙都美	平成 16年 4月～平成 17年 3月
	川島 由利子	平成 16年 4月～平成 17年 3月
	山口 和昭	平成 16年 10月～平成 19年 9月
	山崎 美香	平成 17年 4月～平成 21年 3月
	荒井 裕子	平成 17年 4月～平成 18年 3月

事務職員	岩瀬 茜	平成17年 4月～平成18年 3月
	嶋本 勇	平成18年 4月～平成20年 3月
	村田 百合子	平成18年 4月～平成22年 3月
	中村 美帆子	平成18年 4月～平成21年 3月
	堀川 香文	平成18年 4月～平成20年 3月
	舟越 純子	平成19年 4月～平成23年 3月
	村島 義仁	平成19年10月～平成21年 3月
	佐藤 三郎	平成20年 4月～平成21年 6月
	宮崎 香代子	平成20年 4月～平成25年 3月
	小林 利光	平成21年 4月～平成26年 2月
	荒竹 葉子	平成21年 4月～平成26年 3月
	岡野 沙矢香	平成21年 4月～平成25年 3月
	川田 茂	平成21年 7月～平成26年 9月
	濱野 由衣	平成22年 4月～平成28年 3月
	太田 奈奈	平成24年 5月～平成27年 3月
	江頭 あゆみ	平成25年 4月～平成29年 4月
	鳴海 幸雄	平成26年 3月
	尼崎 彰	平成26年 4月～平成29年 3月
	布村 美紗	平成26年 4月～平成28年 3月
	金子 仁	平成26年10月～平成27年 3月
	佐藤 富明	平成27年 4月～令和 2年 3月
	山本 涼子	平成27年 4月～平成27年10月
	山路 彩乃	平成27年11月～令和 2年10月
	綾香 美穂	平成28年 4月～平成29年 3月
	市瀬 久美	平成28年 4月～令和 2年 3月
	田中 愼一	平成29年 4月～令和 4年 3月
	片山 奈苗	平成29年 4月～平成29年12月
	山頭 奈穂子	平成29年 6月～令和 4年 5月
	天田 実佳	平成30年 1月～平成30年 9月
	川畠 美穂	平成31年 1月～
	汐除 時也	令和 2年 4月～令和 3年 3月
	平尾 加奈子	令和 2年 4月～
内藤 東望枝	令和 2年11月～	
近藤 廣任	令和 3年 4月～	
竹中 望	令和 4年 4月～	

編 集 後 記

長引く新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響もあり、実施を危ぶんでおりました長崎学習センター開設30周年記念事業も5月28日開催の「記念式典」及び「記念講演会」、7月31日及び8月27日開催の「記念公開講座」、10月30日開催の「記念文化祭」と無事開催することができました。今回の「記念誌」の発行をもちまして大きな記念事業のほぼすべてを終えることができました。残す事業は、第2学期に開催予定の4つの「記念公開講座」のみとなりました。

このたび「長崎学習センター開設30周年記念誌」を発行することができたのは、ご寄稿を賜りました卒業生・在学生及び歴任教職員の方々のおかげです。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

記念事業を企画するにあたり、学生代表を入れた「長崎学習センター開設30周年事業委員会」を組織して各事業を実施して参りました。本誌の発行については、基本事項として、前回発行の20周年記念誌を踏襲した内容とすること、主に直近10年間の内容とすること、記録媒体としての役割を持たせるため必要に応じ過去30年分の記録を載せることを事業委員会で決定して編集を進めてきました。20周年から30周年までの10年間の記録としてご活用いただくとともに放送大学長崎学習センターのこれまでの歩みを知っていただければ幸いです。

放送大学長崎学習センター職員一同

放送大学長崎学習センター開設30周年記念誌

2022年11月

《編集・発行》

放送大学長崎学習センター

〒852-8521 長崎市文教町1番14号

TEL 095-813-1317 FAX 095-813-1325

<https://www.sc.ouj.ac.jp/center/nagasaki/>

長崎(くんち)

